

東台遺跡Ⅱ

第8 地点発掘調査報告書

1985. 3

埼玉県大井町史編さん委員会

東 台 遺 跡 II

第 8 地点発掘調査報告書

1985. 3

埼玉県大井町史編さん委員会

は　じ　め　に

大井町の町史編さん事業の原始古代（考古）部門においては、昭和52年の江川南遺跡（縄文時代中期）の発掘調査を皮切りに、今回の東台遺跡第8地点の発掘調査まで、計12件の調査を実施し、これまでに5冊の調査報告書を刊行してまいりました。本書をもって大井町史の調査報告書としては区切りをつけ、詳細な検討・考察は、大井町史「通史編」・「資料編」の中に反映させていく予定です。

調査報告ということでは、とりわけ町民の皆さまに親しみやすく、かつ、わかりやすくという点に留意し、写真を本文中にくみ込み編集しました。

町史編さん過程での経過報告という側面も有する調査報告書です。種々ご意見もあろうかと思いますが、「通史編」・「資料編」編さんのための研究活動を一層推進してまいりたいと存じておりますので町史編さんへのご理解をさらに深めていただければ幸いです。

最後に、発掘調査を快諾してくださった地主さん、及び今回の調査に協力いただいて皆さまに、深く感謝申し上げます。

1985年3月

大井町史編さん委員	小泉	功
大井町史編さん調査協力員	今井	堯

1. 本書は大井町史編さん事業の一環として発掘調査を実施した東台（ひがしだい）遺跡第8地点（大井町大字大井東台673番地に所在）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大井町史編さん委員会原始・古代部門の調査研究の一環として、東台遺跡における縄文時代の集落及び古墳時代～平安時代の遺構の確認を明らかにしていくために行なわれた。
3. 発掘調査は大井町史編さん委員会が調査主体者となり、小泉 功・今井 堯・坪田幹男が担当し、昭和59年8月18日～同年9月21日まで調査を実施した。
4. 発掘調査にあたっては土地所有者である大隅康雄氏をはじめ野溝繁樹氏・野溝繁枝氏の御理解と御協力を得た。記して感謝いたします。
5. 本書の執筆は以下のとおりである。

第1章・第2章 坪田幹男

第3章第1節—小泉 功 第2節—今井 堯・鈴木加津子 第3節—坪田幹男

第4節—今井 堯 第5節—今井 堯・坪田幹男

第4章 小泉 功・今井 堯・鈴木加津子・坪田幹男

6. 本書の編集は坪田幹男が行なった。遺構図版・写真撮影は坪田幹男、遺物実測・遺物図版は鈴木加津子の協力をえた。
7. 調査から報告書刊行に至るまで、次の方々からご指導、ご援助いただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略）
会田 明・荒井幹夫・石子正明・肥沼正和・小出輝雄・笹森健一・清水象次郎・
十菱酸武・高木文夫・高橋 敦・並木 隆・西川正己・橋口尚武・松本富雄
8. 発掘調査および整理作業にあたっては、下記の皆さんのご協力により、なったもので記して感謝の意を表したい。（敬称略）

（発掘調査）

跡部 信・荒野菊江・石川銀造・石垣ゆき子・井上晴江・井上英勝・江崎輝一郎・
大曽根重子・大曽根紀夫・河野綾子・金子幸子・河西和子・斉木 厚・下仁良子・
白石 純・新庄 潤・杉山恵美子・鈴木英子・多田カツエ・田中達也・田村福次郎・
筒場孝志・中嶋末子・中嶋俊明・中田藤子・中村美智代・橋本伸久・細谷清作・
前田静江・松木美栄子・松本考史・松本直史・三上茂助・宮原 淳・山下一枝・
山田寛和・米倉 亮・和田敏之

（整理作業） 小栗久子・須藤さち子・鈴木加津子・柚木嘉図子・

高橋けい子・中田藤子・矢内明子・米倉やす子

目 次

例 言

第1章 遺跡の立地と過去の調査概要	1
第2章 調査の目的と経過	7
第3章 発見された遺構と遺物	9
1), 13号住居址とその出土遺物	10
2), 土壙とその出土遺物	19
3), 炉穴とその出土遺物	29
4), 掘立柱建物柱穴群	30
5), 遺構以外の場所から出土した遺物	33
第4章 まとめと今後の課題	40
図 版	48

挿 図 目 次

第1図 東台遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第19図 2号炉穴出土土器 ($\frac{1}{3}$)	29
第2図 砂川堀流域の遺跡分布	3	第20図 掘立柱建物柱穴群	31
第3図 東台遺跡周辺の地形 ($\frac{1}{5,000}$)	5~6	第21図 掘立柱建物柱穴周辺出土遺物 ($\frac{1}{3}$)	32
第4図 遺構分布図 ($\frac{1}{300}$)	9	第22図 遺構外出土土器 1 ($\frac{1}{3}$)	33
第5図 13号住居址 ($\frac{1}{60}$)	11	第23図 遺構外出土土器 2 ($\frac{1}{3}$)	34
第6図 13号住居址炉址 ($\frac{1}{30}$)	12	第24図 遺構外出土土器 3 ($\frac{1}{3}$)	35
第7図 13号住居址出土土器 1 ($\frac{1}{3}$)	13	第25図 遺構外出土土器 4 ($\frac{1}{3}$)	36
第8図 13号住居址出土土器 2 ($\frac{1}{3}$)	15	第26図 遺構外出土土器 5 ($\frac{1}{3}$)	37
第9図 13号住居址出土土器 3 ($\frac{1}{3}$)	16	第27図 遺構外出土遺物 ($\frac{1}{3}$)	38
第10図 13号住居址出土土器 4 ($\frac{1}{3}$)	17	第28図 東台遺跡全体図 ($\frac{1}{1,600}$)	45~46
第11図 13号住居址出土石器 ($\frac{1}{3}$)	18		
第12図 土 壙 1 ($\frac{1}{60}$)	19		
第13図 2号土壙 ($\frac{1}{30}$)	20		
第14図 2号土壙出土土器 ($\frac{1}{3}$)	20		
第15図 土 壙 2 ($\frac{1}{60}$)	24		
第16図 土壙出土石器 ($\frac{1}{3}$)	27		
第17図 土壙出土土器 ($\frac{1}{3}$)	28		
第18図 炉 穴 ($\frac{1}{60}$)	29		

写真図版目次

図版 1 東台遺跡と周辺の環境	48
図版 2 土 壙 ・ 柱 穴	49
図版 3 13号住居址・2号土壙出土遺物	50
図版 3 13号住居址・土壙出土遺物	51
図版 5 遺構以外から出土した遺物	52

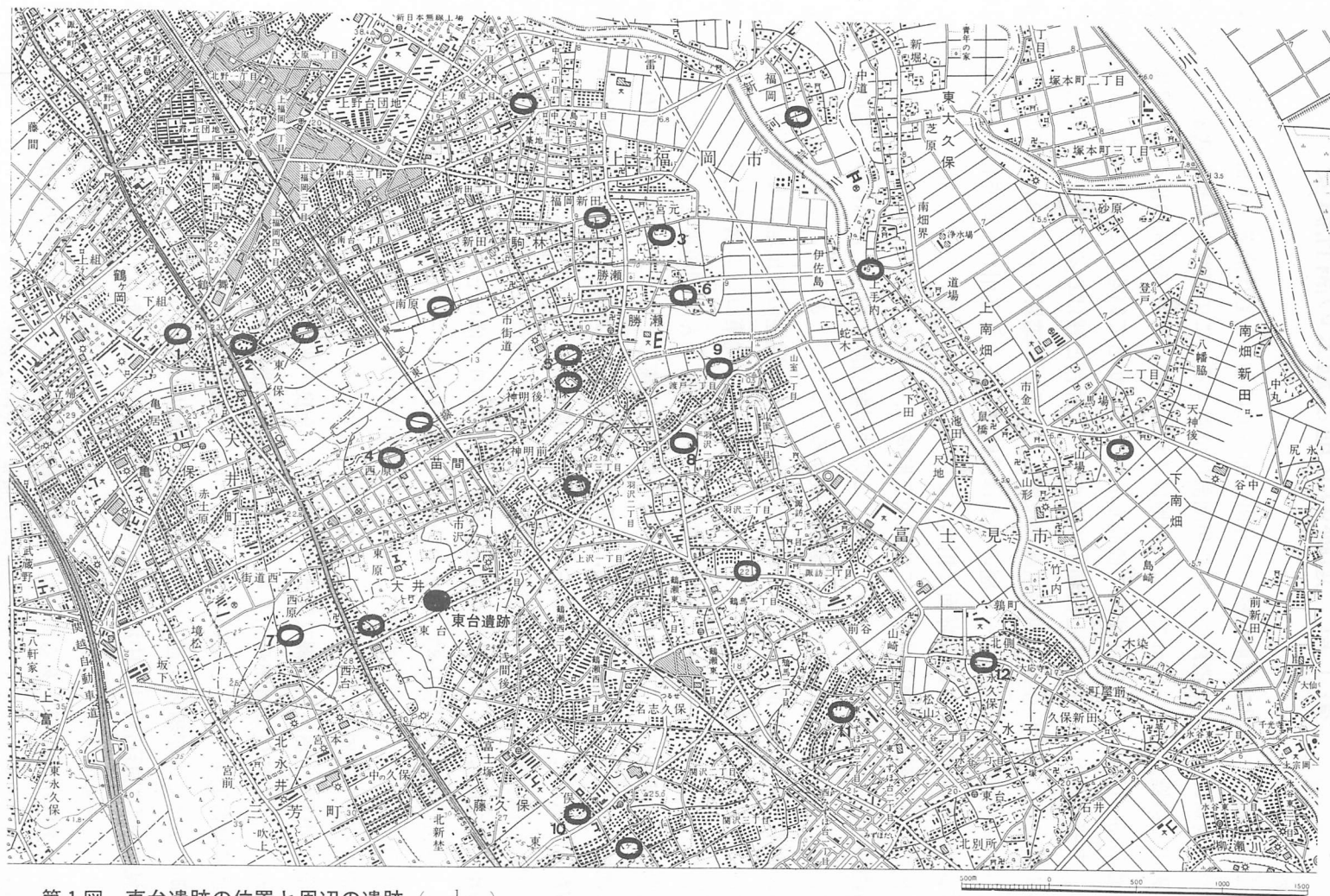
第1章 遺跡の立地と過去の調査概要

東台遺跡は、平坦な地形が続く大井町にあってはもっとも比高差（6m）のある台地縁辺部に帯状に分布する遺跡で、町の東南部に位置する。この遺跡をのせる武蔵野台地の遺跡周辺での標高は25～26mで、この台地はこれより東へ約1.5km先の富士見市貝塚山遺跡（標高15～17m）をへて沖積面（標高6m）につながっている。この台地は、武蔵野台地の北東部にあたり、不老川と柳瀬川に囲まれた大井台と呼ばれる台地で、大井台をうがつ砂川堀に面した段丘崖上に東台遺跡が位置している。本遺跡から500m南方の同一面のボーリング柱状図から関東ローム層の厚さは武蔵野ローム+立川ロームで4.75mで下位には武蔵野礫層が重なり、武蔵野面に相当していることがわかる。

砂川堀は武蔵野礫層をけずって沖積面を形成し、台地面との比高は約10mあり、北東から南西方面に段丘崖線をつくっている。この砂川堀沿岸の段丘上には綿々と遺跡が立地している。砂川堀の歴史については議論を要するところで、あえてここでは言及しないが、砂川堀沿岸の周知の遺跡について概観していきたい。現在の砂川堀は大きく河川改修され往時の流れは上流域（所沢市）でしかみられないが、関東ローム層の上をすべるように流れ、堀という名称をもつ川の歴史的意義はこれまでほとんど問題視されてこなかった。

砂川堀は所沢市・三芳町・大井町・富士見市を貫流しており、18kmの長さを有している。上流域を丘陵部、中流域を台地面、下流域を沖積面と分けるなら、行政区で所沢市が上流域から中流域で流域の $\frac{1}{2}$ 以上を占めている。三芳町から本町にかけてが中流域で、新河岸川と合流するまでの富士見市が下流域に該当する。所沢市では1981年に、富士見市で1979年に総合的な遺跡分布調査が実施・報告されており、ほぼその概要がつかむことができる。（所沢市教育委員会1985、富士見市教育委員会1979）三芳町は、砂川堀流域における遺跡の分布は少なく、現在までに上富の永久保地内からナイフ形石器（第Ⅳ層下）の表採資料の存在が三芳町教育委員会によって確認されているのみである。

第2図は先土器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡分布を示したものである。先土器時代の遺跡分布をみると、著名な砂川遺跡周辺と本町から富士見市にかけての武蔵野台地上に点在している。このことは、上流から中流にかけての谷と、三芳町から本町にかけての崖線の発達という地形に大きく起因している。また、三芳町の永久保地内発見のナイフ形石器は、中流域の平坦な地形からの出土であり、今後の調査が期待される場所である。また先土器時代に関しては、遺跡のすべてが右岸に集中している。これも右岸の崖線が急傾斜であるのに対し、左岸は緩い斜面という非対象の崖からくる地形的な要因からであろう。先土器時代の遺跡が湧水と密接な関係をもって占地したことは、砂川



第1図 東台遺跡の位置と周辺の遺跡 ($\frac{1}{37,500}$)

1. 亀居遺跡 2. 江川南遺跡 3. 鷺森遺跡 4. 西ノ原遺跡 5. 苗間東久保遺跡 6. 宮廻遺跡
7. 小田久保遺跡 8. 羽沢遺跡 9. 貝塚山遺跡 10. 俣埜遺跡 11. 打越遺跡 12. 水子貝塚遺跡

堀流域でも明言できることである。縄文時代になると遺跡の分布は上流域の丘陵部で増加し、下流でやや増加してくる。縄文時代早期の遺跡は丘陵部でみられる他は、本町の東台遺跡、富士見貝塚山遺跡等と少ないが、前期には立川面へ新なる集落立地がなされてくる（富士見市宮廻遺跡等）、中期になると一般的には広範な生活立地拡大と急激な遺跡の増加があるのだが、砂川堀流域に関しては、ほぼ早期、前期の生活立地を踏襲している。後期以降は遺跡減少傾向の範囲内にある。弥生時代の遺跡は、現在この流域上には確認されていない。いうまでもなく生活を支える生産形態の変化を背景にもつ時代で、その生産形態を導入するうえで、地形的特質の制約が大きく反映していたためと考えられる。古墳時代以降は、上流から中流にかけて古墳時代の遺跡分布が顕著で、奈良・平安時代の遺跡分布もそこに複合しているのが特徴的である。また下流域で自然堤防上の平安時代の遺跡や宮廻遺跡以外では本町の大井戸遺跡と遺跡数も少ない。

以上これらは分布調査の結果であり、きわめて平面的な見方ではあるが、砂川堀流域の遺跡分布の現状から出発したもので、今後、細部の検討を行っていく必要が十分にあると思われる。以上の各時代の遺構をもつ遺跡の一つとして本報告の東台遺跡が位置づけられることは、東台遺跡の歴史的重要性をいっそう浮きぼりにするものである。



第2図 砂川堀流域の遺跡分布

次に、これまでの東台遺跡での調査（第1地点～第9地点）を概観し、その成果を具体的にみていきたい。

調 査 地 点	調査年月日	検出された遺構・遺物	調 査 成 果 の 概 要	備 考
東台遺跡第1地点	1981.	縄文時代中期土器	遺跡の西端に位置する調査地点でトレンチをL字形にいて調査、小さな谷の部分の発掘のため遺構の確認はされなかった。	町史編さん事業で発掘調査
◇ 第2地点	1981・12・14 } 1982・2・13	先土器時代石器 縄文時代中期住居址12軒	遺跡の中心部にあたり、わずか667㎡の調査面積から、住居址12軒を確認、勝坂期より加曽利EⅡ期にかけての遺構。主体となるのは加曽利EⅡ期である。曾利式土器の伴出も注目される。7号住居址より石製の装飾品出土。先土器時代の尖頭器及び削器等出土。	調査後宅地造成 「東部遺跡群Ⅲ」1982
◇ 第3地点	1982. 5. 19 } 6. 15	縄文時代中期土壇2基 炉穴7基、柱穴群	遺跡北西部の斜面上で、落し穴の土壇と、小ピットをもつ炉穴が確認されたが遺物は流れ込みと思われるものが多く、須恵器坏片もみられた。	調査後造成 「東部遺跡群Ⅳ」1983
◇ 第4地点	1982. 6. 17 } 11. 18	縄文時代中期住居址3軒 ◇ 後期 ◇ 1軒 土壇14基・集石4基・溝状遺構・先土器時代石器	第3地点と隣接する地点で加曽利EⅠ式期の住居址3軒と堀之内期の住居址1軒を確認、中期住居址はほぼ同一時期とみられ、土壇群は、それらの住居址にかこまれて位置する。また、本町で初めての本格的な先土器時代の調査が行なわれ、第Ⅲ層から第Ⅴ層上部からナイフ形石器、石核を中心として567点検出。また鬼高式期の土師器薬片や、国分期の坏片も溝状遺構覆土上層部から確認された。	「東部遺跡群Ⅳ」1983
◇ 第5地点	1983. 7. 25 } 8. 9	縄文時代中期住居址2軒 土壇1基	第4地点の南側に隣接する地点で加曽利EⅠ・EⅡ式期の住居址を各1軒づつ確認。ここでも曾利系土器の伴出が目立った。	町史編さん事業で発掘調査 大井町史料第30集 「東台遺跡」
◇ 第6地点	1984. 1. 9 } 1. 12	縄文時代中期住居址1軒	第2地点の南西部の地点で、径3m×2.7mのほぼ円形を呈する竪穴住居址確認。柱穴は屋外に認められた。加曽利EⅢ式期。	調査後宅地造成 現在整理中
◇ 第7地点	1984. 5. 15 } 6. 13	縄文時代中期住居址4軒 ◇ 後期 ◇ 1軒	第5地点に北接する畑地で、加曽利EⅠ・EⅡ式期の住居址4軒と、堀之内期の住居址1軒の確認であった。	現在整理中
◇ 第8地点	1984. 8. 18 } 9. 21	縄文時代中期住居址1軒 土壇・炉穴・他	当 報 告	
◇ 第9地点	1984. 10. 25 } 1985. 2. 15	縄文時代中期住居址22軒 ◇ 後期 ◇ 1軒 土壇 ピット群 先土器時代雑群	東台遺跡の中心と考えられ予想どおりの遺構と遺物が発見された。勝坂2式以降、堀之内Ⅱ期までの連続する遺跡であることも確認でき、曾利式土器の占める割合が非常に多いことも指摘できる。	現在整理中



第3図 東台遺跡周辺の地形 ($\frac{1}{5,000}$)

第2章 調査の目的と経過

調査の目的

町史編さん事業の一環として鋤入をした発掘調査は、本調査で12件を数える。原始・古代部門内での討議及び協議した中で、今回の調査の目的を2点あげ、それらを追及すべく調査を開始した。

第1点は、本町の遺跡全体の90%をしめる縄文時代の集落構造を明らかにすることである。現在36ヶ所確認されている縄文時代の遺跡での集落規模の調査例はなく、圧倒的に中期に営まれた遺跡が多い中でも、これまで発掘調査が行なわれたのは、亀居、江川南、苗間東久保、西ノ原、東台（第1図）の各遺跡であるが、蚕食的な開発行為にともなう事前の緊急調査によるものが多くを占め、本町における集落論を展開する場合に一定の限界が生じていることから町内で比較的、保存状態もよい今回の東台遺跡をとりあげ1983年夏から調査を実施し、あらためて砂川堀下流域にみられる縄文時代中～後期の集落構造を調査していくことになった。

目的の第2点は、町内の遺跡の大半を占める縄文時代以外の遺跡・遺構の存在を確認することであった。現在、町の遺跡数は40ヶ所を数えるが、これらの遺跡の各時代ごとの割合は、先土器時代12.5%、縄文時代90%、弥生時代以降は10%と弥生時代及びそれ以降の遺跡が極端に少ない。弥生時代は町内では確認されず、その後の土器器・須恵器を伴出する遺構が、わずか東台遺跡第4地点で検出されたのみで、どうしても早急に該期の調査が必要であった。遺物としては、上福岡市境寄りの畑より平安時代の蔵骨器（須恵器）や、大井戸遺跡から出土している。

以上の2点を充たす遺跡として東台遺跡の西北部をとりあげ調査を行なった。調査報告書の作成中、同遺跡第9地点（1,000m²）の調査を終了し、これまでにない成果があがり、東台遺跡で確認された住居址は48軒を数え、中期中葉～後期前半にかけた連続する集落であることがあらためて確認された。

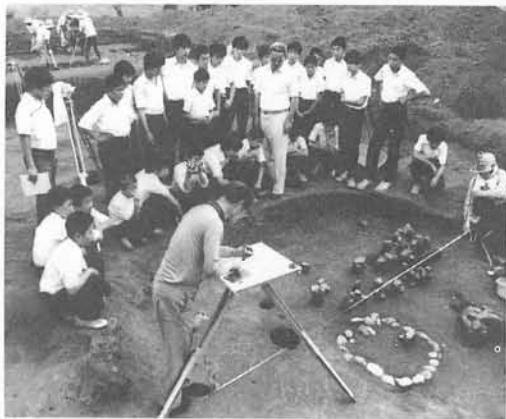
調査の経過

調査は1984年8月18日より9月21日まで発掘調査が実施され、その後資料整理に入り、1985年3月10日に終了した。以下、経過の概要を日誌抄に記録しておきたい。

8月18日 調査区の草刈りから始め、その後調査区の南北にそって幅2mのトレンチ～21日 を3本設定し、表土の掘りあげを行なった。

22～25日 あらたに4本のトレンチを入れることにより、結果的には、全面発掘となり、すべて人力による表土はぎを実施した。表土は浅いところで35cm、深

- いところ（北寄り）で60cmを測る。
- 27日 調査区を精査し、遺構のプランを確認する。住居址的なプランを2ヶ所確認。その他に土壇、炉穴、柱穴等も確認できる。
- 28～30日 遺構の掘りさげ。30日、13号住居址内石囲い炉が表面露出、2号土壇覆土上層部に称名寺式期の土器集中がみられる。
- 31～
9月4日 13号住居址土層断面図とり、2号土壇の写真撮影、調査区全体のレベルング。
- 9月5日～
9日 各遺構の測量作業にはいる、清掃。
町教育委員会主催の遺跡見学会が開かれた。午前・午後の2回にわたり、あいにくの雨であったが、遺跡近隣の住民はもとより、隣市より120人のぼる参加者が得られた。当日、13号住居址の埋蔵の説明に聞き入っていた参加者の中から、つい最近まで玄関のトボグチにエナを埋める風習があったという、地元から貴重な意見がだされ見学会も大きくもりあがった。
- 10～11日 全測図をとる。
- 12～17日 埋め戻し。
- 17～21日 13号住居址の石囲い炉の取りあげる計画をたて、努力したが、吊り上げる時にバランスを失って、取りあげ作業に失敗。埋め戻しを終え、すべての発掘調査を終了する。
- 12月14日 資料整理をはじめ、調査報告書のための作業を3月10日で終了する。



遺跡見学会風景

第3章 発見された遺構と遺物

1981（昭和56）年の第1地点での調査から、今回までの調査の積み重ねにより、ようやく東台遺跡の特徴・性格が明らかになってきた。しかし、まだまだ調査区域が遺跡全体のわずかな部分でしかないことから、全体像をつかむには、未だ決定的な資料に欠けることも否定できない現状である。

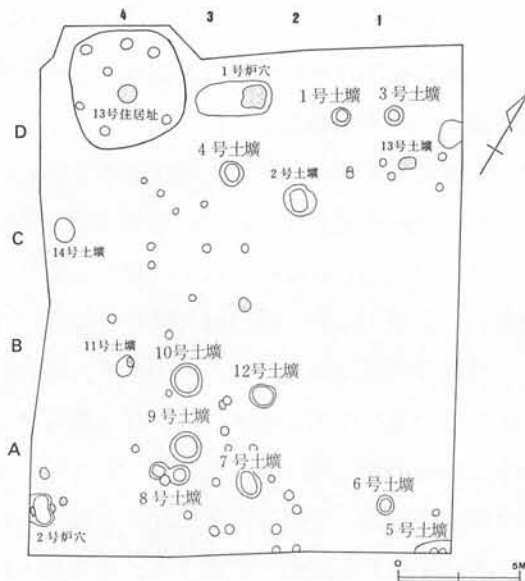
今回の調査では、過去の調査で得た成果や問題点を再認識すると共に、調査の目的を常に念頭におきつつ、ある程度の究明に必要な資料を得るに至った。

以下、具体的な報告に入る前に、今回確認された遺構と遺物について概要を記しておきたい。

○**先土器時代** 東台遺跡における立川ローム層の保存状態は良好で、第4地点での調査では、第Ⅲ～Ⅴ層にかけて遺物群がみられた。今回の調査では、13号住居址直下の第Ⅳ層で被熱した礫とスクレーパーを検出した。

○**縄文時代** 縄文時代では、早期～後期の遺構と遺物群が検出された。中期後半の竪穴住居址一軒（13号住居址）、土壇14基のうち早期、後期1基が出土遺物により時期判定が可能で、残りは時期不詳だが概ね中期の土壇と思われる。また炉穴2基が検出された。

○**平安時代** 該期の柱穴群が3群で、表採資料も含めて須恵器坏片等が40片、土師器片が10数片出土したが、いずれも細片で図示できたのはわずかであった。



第4図 遺構分布図 (1/300)

1) 13号住居址とその出土遺物

位置 東台遺跡西地区の13号住居址は、第8地点の西北隅（4D区）に属し、東台遺跡全体では西北、台地縁辺部に位置している。

覆土 遺構は表土をなす耕作土層に続く、1層の下層面で確認された。住居址内覆土を堆積順に記述すると、最初の層は黄褐色土層でロームブロックを含み、レンズ状に堆積しており、無遺物の層である。ついで、壁際上面からゆるく、住居址中央部に深く傾斜する暗褐色土層が堆積していた。この層は多量の土器と若干の円礫を包含しており、大形土器片は中期後半のものが顕著である。この層の上部はローム粒子混りの暗褐色土で、その下層は比較的ローム粒子が少なく、住居址内でその厚さは約10cm内外である。大形土器片は、この上部と下部の接する部分から多く検出された。

住居址の構造 平面形は隅丸台形の住居址で、南側が広がっている。

規模 東西 450cm、南北 460cm、遺構確認面から床面までの深さは南側で約35cm、低い北側で約22cmであった。壁溝は伴わず、貼り床および複合関係はない。

炉 炉は中央部のやや北西よりに位置し、その規模は長径約90cm、短径約80cm、中央部の深さ36cmほど掘り込んでつくられ、径8～20cm、厚さ5～10cm前後の円礫を一重にめぐらした円形の石囲い炉であり、その内径は50～60cm前後である。この炉の中央に、胴下半部を欠く炉体土器が設置されていた。したがって、炉体土器を内包する石囲い炉で、他に地床炉などは認められなかった。石囲い炉に用いられた円礫は砂岩、チャートで、砂川堀などの中・下流域で容易に得られるものである。

埋甕 住居址南側の壁際に埋甕が検出された。胴下半部を欠くキャリパー形の深鉢形土器で、上面が僅かに中央部に向かってやや傾斜していた。

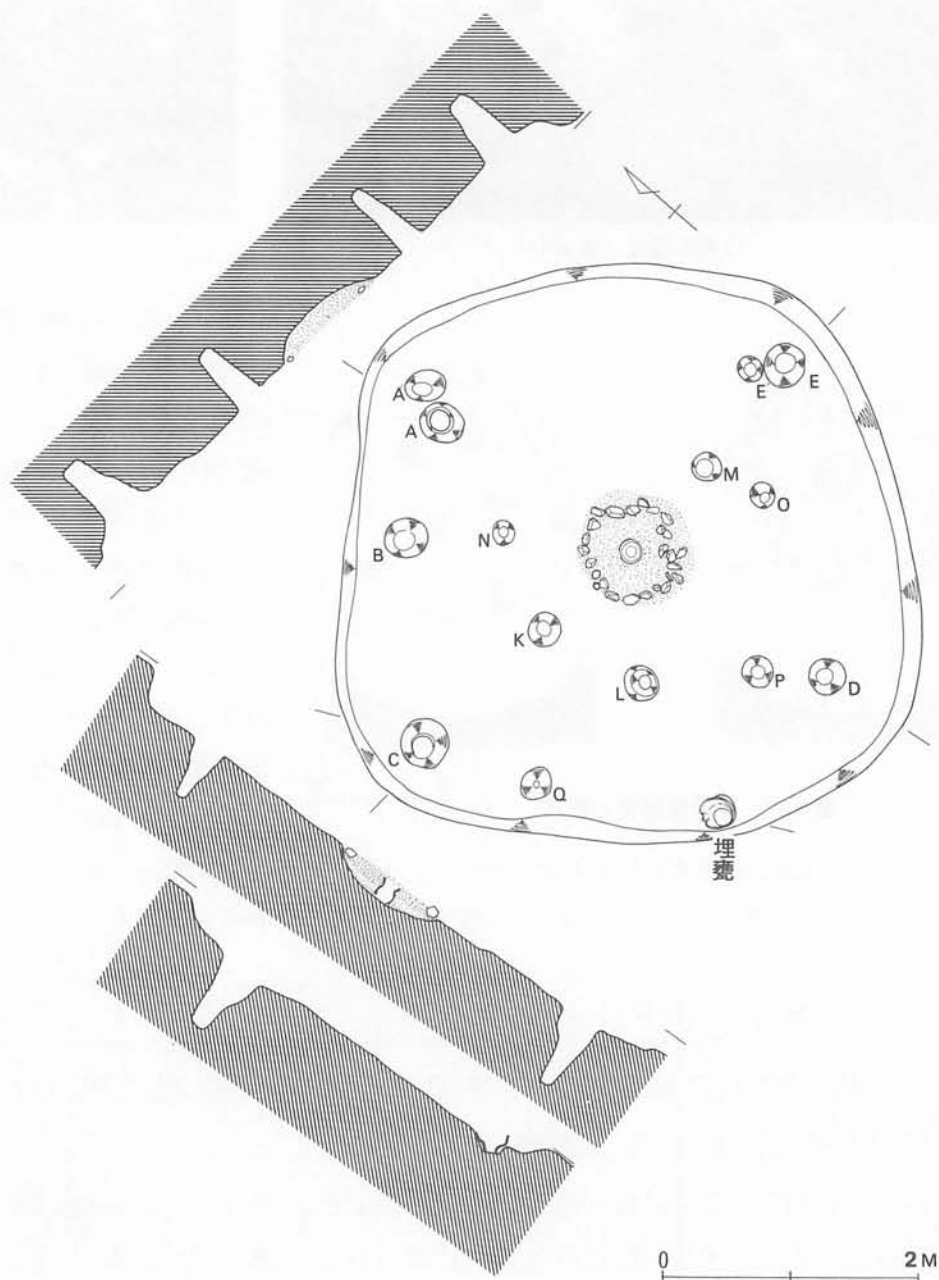
床面 床面はほぼ平坦で、北壁近くを除いて全体に硬化面が広がり、特に炉周辺および南側にその傾向が顕著であった。床面の標高は 26.36m（平均値）である。

柱穴 柱穴は計13本で、屋外には認められなかった。埋甕と炉を結ぶ延長線上の中軸を対象に4本の支柱穴と、側柱穴および炉を取り囲む柱穴群から構成されている。支柱穴の掘方上面の径は32～36cmで、真柱部底径は18～22cm、床面からの深さ47～64cmで太く深い特徴を示している。石囲い炉を囲むようにある5本の細い柱は真柱部の径が9～12cmで、深さは52～57cmのものが3本と12cmのものが2本であった。L・M・Kの3本は支柱穴より柱の径が細く、平面配置が異なり、炉周辺に位置し、中央部の上屋を支える棟持柱的性格をもつものであろう。南側の2本の支柱穴の内側に位置する、深さ12～16cmの浅い丸味のある2本の柱穴は、掘方上面の径は28cm前後で、また支柱穴に接する、径と深さが各10cmほど

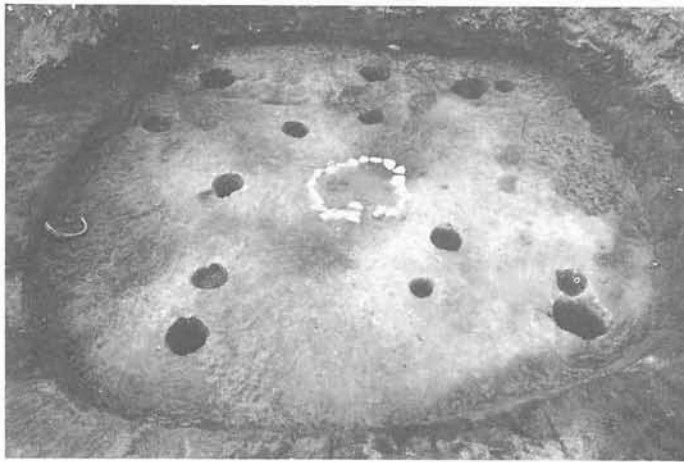
1) 13号住居址とその出土遺物

の柱穴は側柱を示すものであろう。

13号住居址は埋甕と石囲い炉を結ぶ延長線上を主軸とするとN—6°—Eで南側に入口があり、埋甕を置き、4本の支柱穴と中央部の上屋を支える棟持柱で構築している。また入口部には2本の対象的な支柱穴があり、西壁の中央部にあるBは側柱穴であるが大きく深いものである。

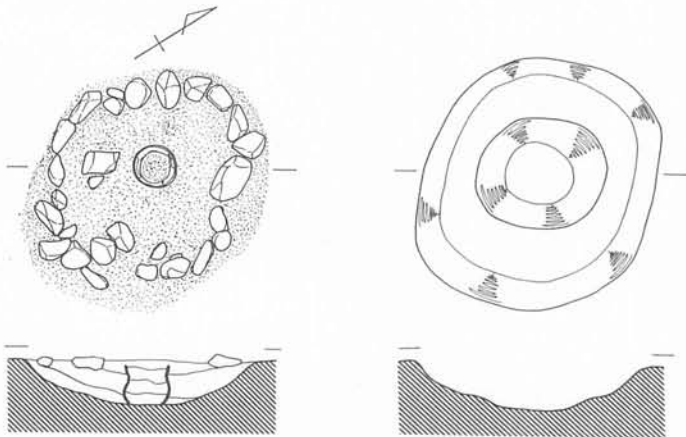


第5図 13号住居址 (1/60)



13号住居址（東より）

▼ 炉 址



第6図 13号住居址・炉穴 (1/30)

時期 加曽利EI新式期である。

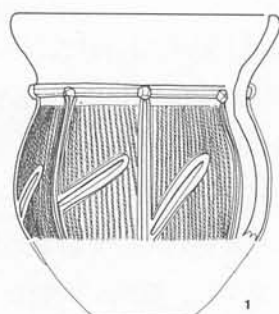
本住居址の調査後、町内では比較的遺存状態の良好な石囲い炉の取り上げ作業を実施した。石囲い炉が大形のため、かなりの重量となった。そのため重機を使用しての取り上げとなったが、結果的には、バランスをややくずして作業は不成功に終わった。ラテックス利用等の石膏復原や、遺

構の切り取り作業が最近多く行われている今日、本町では初めての試みであったが、今回の教訓をいかして貴重な遺構の復原をおこなえたらと思っている次第である。

柱穴	A	B	C	D	E	E	K	C	M	O	P	P	Q
(m)													
底実高	27.783	27.894	27.725	27.89	27.807	28.28	27.84	27.792	27.804	28.225	28.283	28.203	28.245
(cm)													
掘方	32×36	32×36	36	32	32×36								
(cm)													
底径	19	18	20	18	18	10	12	12	12	8	8	12	4
(cm)													
深さ	58	47	64	47	56	8	52	57	56	14	8	16	12

13号住居址柱穴一覧表

1) 13号住居址とその出土遺物



出土状態：炉体土器

口 径：17 cm

胎 土：細粒を含む

色 調：内外面共、橙褐色

文様構成：燃糸、隆帯、頸部のコブを起点として2本一対の隆帯が垂下しそれぞれの隆帯から右上方向に向かって隆帯上の枝がのびる。



出土状態：埋設土器

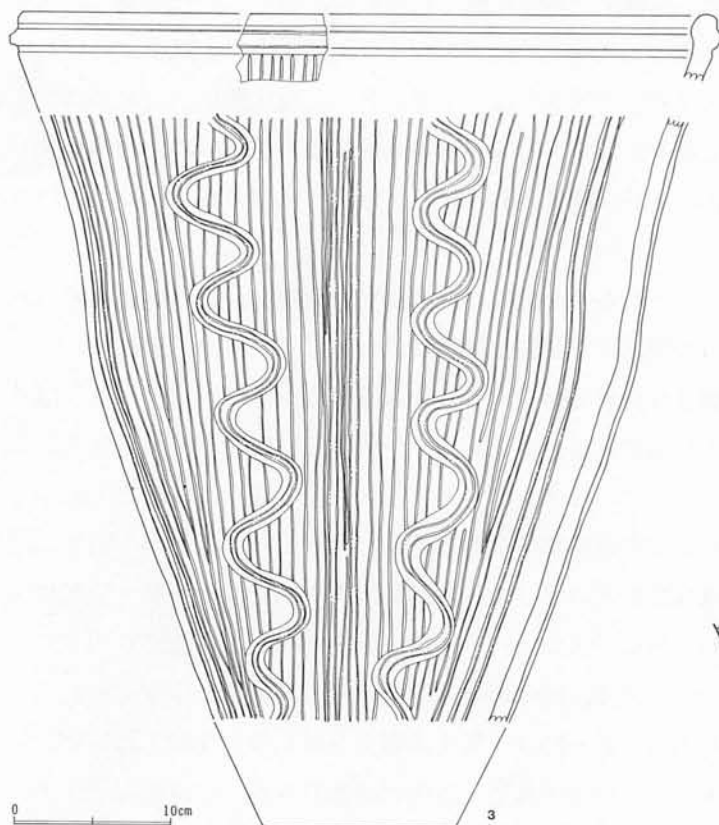
口 径：28.5 cm

胎 土：粗粒子状

色 調：暗褐色

文様構成：渦巻文と地文の縄文を内包する楕円形と楕円区画を斜位に2分割したものを1単位としている。胴部RLの太い縄文を地文として3本1組の沈線と2本1組の蛇行沈線、また頸部下位に横位と数本の平行沈線を引き棒状工具による連続刺突文を施し、蛇行する隆帯を形成。

0 5 cm



出土状態：覆土内

推定口径：45 cm

胎 土：小石粒を含む

色 調：暗褐色

文様構成：口唇部が内側に肥厚、直下に横位の1条の横帯の貼付がある。地文の粗い条線の上に2条の隆帯と蛇行隆帯が垂下する。

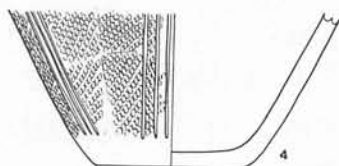
出土状態：覆土内

底 径：10 cm

胎 土：粗粒子状

色 調：内外とも褐色

文様構成：地文にLRの縄文、3本1組の沈線が施されている。



第7図 13号住居址出土土器1 (1/5)

覆土中の土器（第8図～第10図）

第8図の土器は連弧文系土器を中心とするもので、1～7は同一個体の深鉢である。口径約33cm、口縁部文様は、縦位の粗い沈線を描き、次に横位の平行沈線と連弧状の平行沈線を施文した土器である。胎土に砂粒を含み、暗褐色で、焼成は比較的良好である。

8～10も同じ様な口縁部の土器である。11は条線文に沈線を組合せた胴部片である。

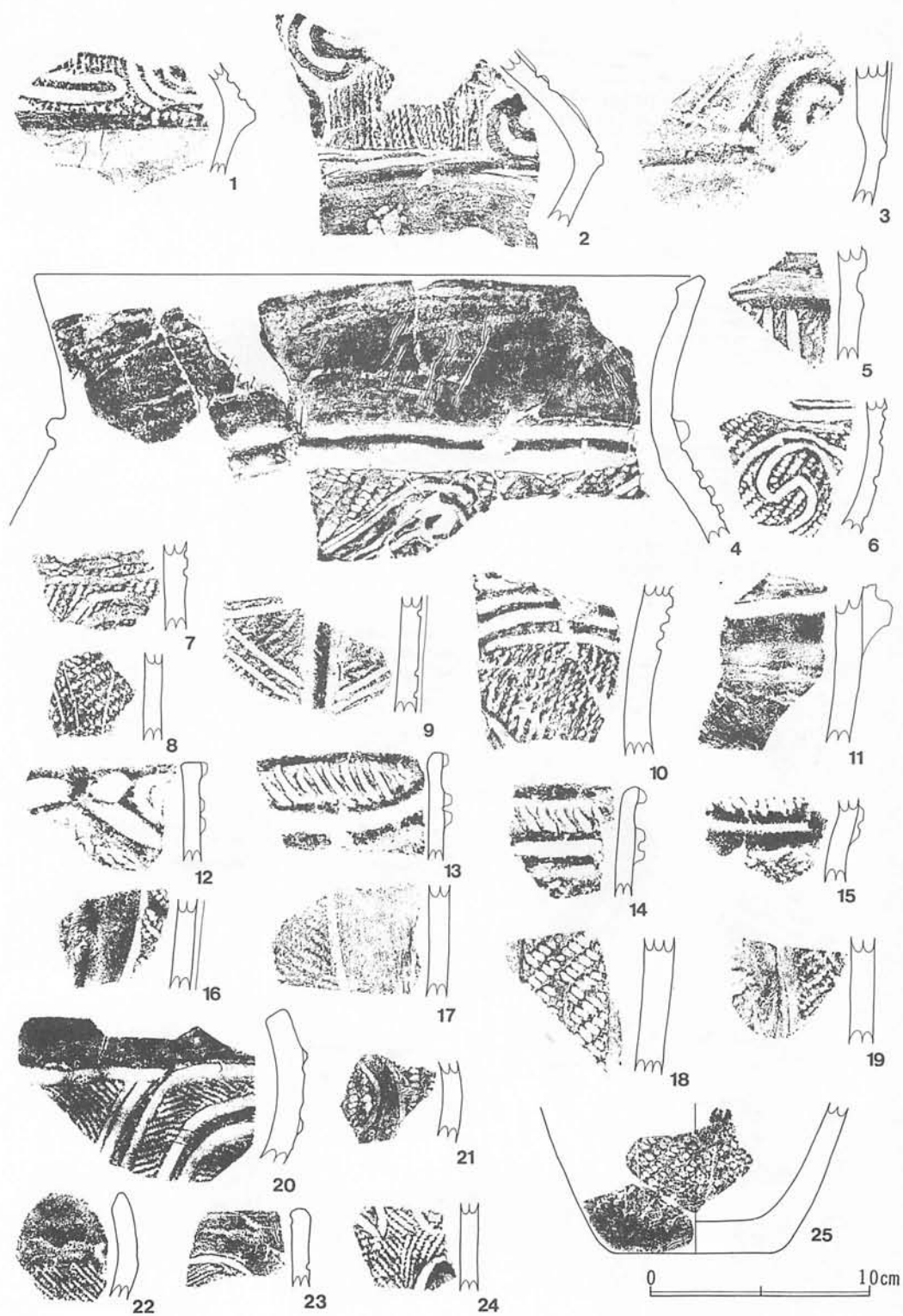
12～13は同一個体の土器で、縦位の条線文と横位の平行沈線に連続刺突文を組合せた頸部でその下部に連弧文がある。胎土に小礫と砂粒を含み、褐色を呈し、焼成は良好である。

14・15も同一個体の土器であり、口縁部に4条の沈線がめぐり、沈線下の上下に棒状工具による刺突文が施されている。下位には弧状の平行沈線文があり、地文は条線がある。胎土に砂粒を含み、暗褐色で焼成は極めて良好である。16・17は8に類似した連弧文と条線によって構成された文様帯の胴部片である。砂粒を多く含み、暗褐色を呈し、焼成良好の土器である。18～21は隆帯をもつ土器で、18は口縁部で地文に条線のあるもので、19は隆帯の区画文を配し、地文に条線をもつ頸部の土器片である。共に砂粒を多く含み、黒褐色を呈する焼成良好のものである。20は口縁部、内面に貼付の隆帯がめぐり、その上部の口唇部から、外面にかけて粗い条線文が斜位に施されている。胎土に砂粒が多く、褐色の焼成良好の土器である。21は隆帯と沈線で区画文をつくり、区画内に条線を施したものである。胎土に砂粒を含み色調は褐色で焼成良好の土器である。22は隆帯と沈線文による懸垂文をつくり、地文は条線である。23は20と同一個体の土器である。24は粗い条線文で、ボタン状の貼付け文がある。25～27は隆帯の貼付文と、地文に条線のあるもので、25は頸部、26・27は胴部片である。

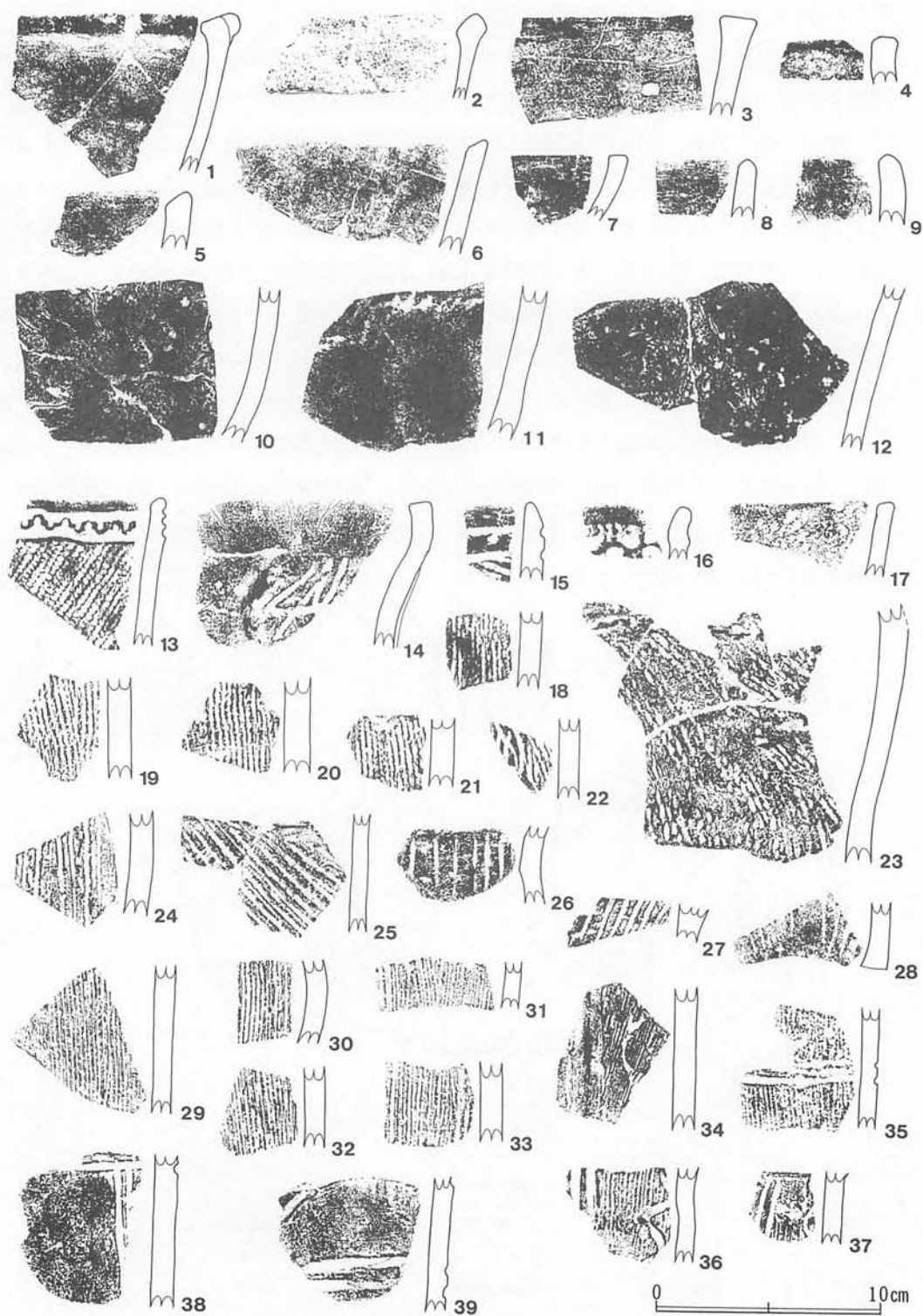
第9図の土器は地文に縄文があるものを主とし、隆線文、沈線文、磨消縄文が施されているものである。1は浅鉢形の頸部片で沈線と隆帯による区画文と棒状工具による刺突文を施したもので、下位は研磨された無文帯である。2も浅鉢形土器の頸部で、上半部に隆帯と沈線による渦巻文を、また地文には撚糸文を施し、下半部は無文で研磨されている。3は渦巻文のある土器である。4は口縁部が無文で頸部との境を横位の隆帯で区画して、渦巻文を配し地文に縄文がある大形の深鉢形土器である。推定口径は30.5cm、胎土に砂粒を含み、色調は赤褐色で焼成は良好である。6～11は、地文の縄文に、沈線・隆帯による区画文、または渦巻文を施したものである。12～15は、横に楕円形の区画文がめぐり、区画内に粗い条線が施されているもので、同一個体の土器である。胎土に小礫と砂粒を含み黒褐色を呈し、焼成は良好である。15～25は、地文の縄文を無文帯と沈線・隆帯によって内包させたもので、20はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部である。25は底部で、外面に縄文が施され、その左右両側に沈線の懸垂文がある。底部外径 7.6cm、胎土に砂粒を含み、



第 8 図 13号住居址出土土器 2 (1/3)

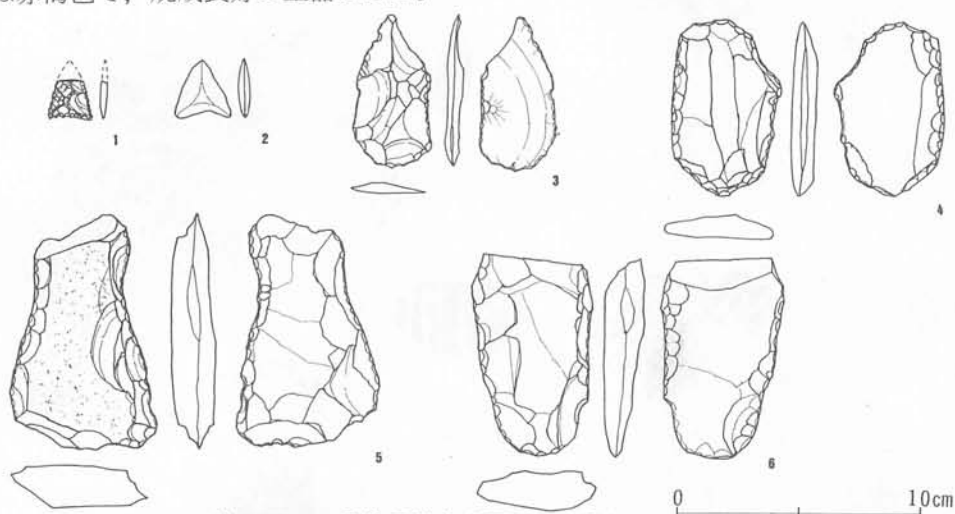
第9図 13号住居址出土土器 3 ($\frac{1}{3}$)

1) 13号住居址とその出土遺物

第10図 13号住居址出土土器 4 ($\frac{1}{3}$)

色調は赤褐色で、焼成は極めて良好である。

第10図の土器は、無文の口縁部破片を主として、さらに条線あるいは撚糸文のある胴部破片である。1～12は、すべて無文帯で、1は口唇部に隆帯がめぐるものである。10～12は、胴上半部である。13は口縁部に二条の沈線の間に、棒状工具による刺突文を上下に施し、波状文をめぐらしたもので、地文は縄文である。胎土に砂粒を含み、赤褐色の焼成良好の土器である。14は口縁に無文帯がめぐり、隆帯の区画文があり区画内に粗い条線が施されているもので、胎土に小礫と砂粒を含み、色調は暗褐色、焼成良好の土器である。15は沈線の区画文のある口縁部で、16は爪形文の下位の隆帯へ上下交互に刺突文を施した口縁部の土器である。17は口唇部から下位に単節の縄文を施したものである。胎土に粗い砂粒を含み、赤褐色を呈して焼成のもろい土器である。18～22は、地文に撚糸文のある胴部片で、23は粗い撚糸文が施されている。24～33の土器は条線文を主体とする破片で、26は頸部、28は底部片である。34～37は地文の条線に、縦位または横位の沈線・隆帯文のある土器である。38・39は、沈線による区画文・区画内は無文である。胎土に砂粒を含み、色調は赤褐色で、焼成良好の土器である。



第11図 13号住居址出土石器 (1/3)

石器観察表

図番	種別	出土層序	石質	遺存状態	重量 _g	自然面の有無	備考
第11図 1	石 鏃	覆土上層部	チャート	頭部欠	(1.5)	無	基部が直線的で、両側縁を鋸歯状に仕上げている。
2	◇	◇	砂 岩	完 形	1	◇	凹基無茎。研磨されている。
3	スクレーパー	◇	貝 岩	◇	11	◇	両側縁に粗い調整
4	打製石斧	覆土中層部	石墨片岩	上半部欠損	(39)	◇	短冊形
5	◇	覆土上層部	砂 岩	基部欠損	(115)	有	撥形を呈する。
6	◇	◇	◇	上半分欠損	(74)	無	蛤刃の刃部を有し、磨斧に近似

2) 土壇とその出土遺物

東台遺跡第8地点の調査で、土壇14が見出され、これらから石器2点と土器90点・土錘1点が出土した。調査時の土壇番号と整理後の報告番号が異なるので、その対称表を掲げておく。報告番号の後の括弧内は調査時の番号である。1 (1)・2 (2)・3 (3)・4 (4)・5 (21)・6 (22)・7 (23)・8 (24)・9 (25)・10 (26)・11 (27)・12 (30)・13 (31)・14 (41)。

1号土壇 (第12図)

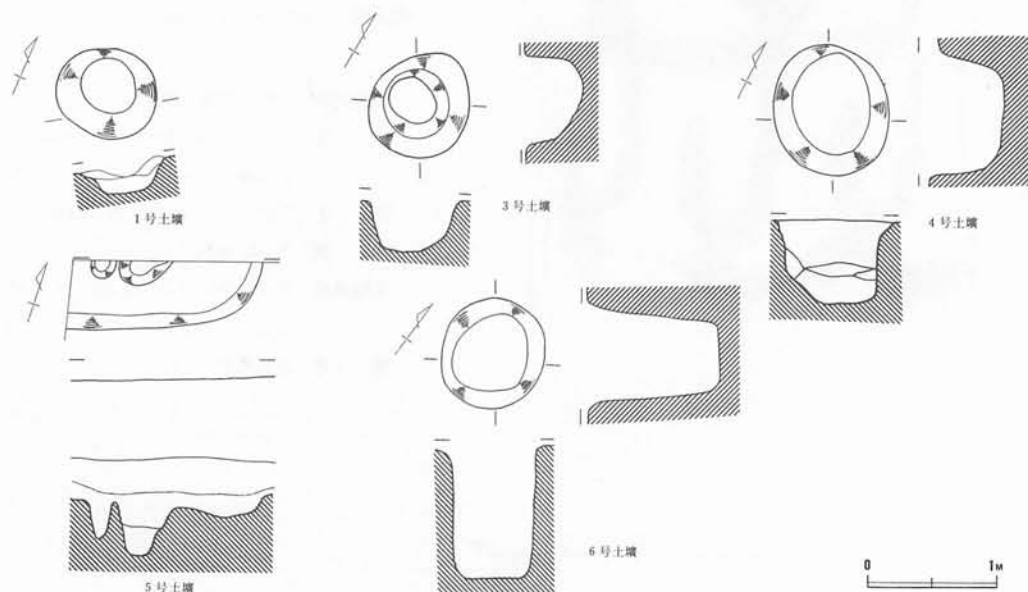
位置：第8地点調査区北東部A4区に位置する。南2.3mに2号土壇が、東1.3mに3号土壇が位置する。

覆土：土壇底から約16cmの厚さで、ロームブロック入り茶褐色土層が堆積し下層をなしている。その上部壇壁寄りにレンズ状にロームブロック入り黒褐色土層が自然流入の形で堆積する。その上部に長径70cmの長円状の窪みに黒褐色土層が堆積し、耕作土が覆う。

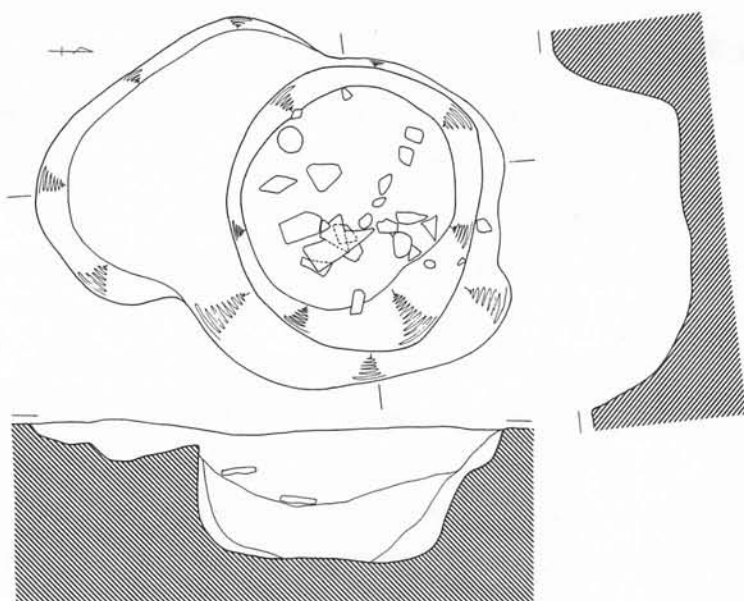
形態と規模：長軸250cmの長方形窪みの中央に掘られた円形土壇である。掘方上面の長径70cm・短径66cmで、底面はほぼ平坦で径40cm。土壇の深さは28cmである。

遺物出土状態：覆土内から計11片の土器が流入の状態で出土した。このうち土師器片は上層から、羽状縄文土器片・勝坂式土器片が出土した。

出土遺物 (第17図1～8)：計11片が出土したが、図示した以外は細片である。その内訳は縄文中期片5・土師器片2である。1・2は単節の羽状縄文をもつ胴部片であるが胎土



第12図 土壇 1 (1/60)



第13図 2号土坑 (1/30)

0 1M

出土状態： 2号土坑覆土中

胴部最大径：約29cm

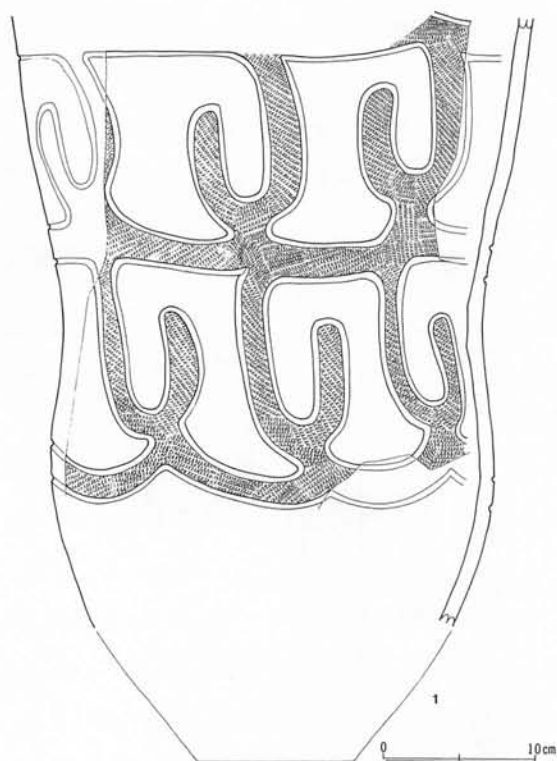
胎土：細砂粒を含む

色調：暗褐色

文様構成：T字状の文様が
体部に重畳するもので、上段
は左方向、下段右方向に向き
を違ったJ字文が7～8単位

に展開するよのである。文様帯下端はJ字文を連絡
する弧状の縄文帯で閉じられている。縄文部は細い
LRの原体による充填縄文、無文部は平滑にナデ整
形がなされている。

備考：器形は体中位でわずかに括れ、口辺部
が緩く開く。胴部の脹らみは弱い。



出土状態： 2号土坑覆土最上層部

口径：9.5cm, 胴部最大径：10.8cm,
底部径：5cm

胎土：砂粒を多く含むが比較的精緻

色調：外面暗褐色, 内面黒色

文様構成：無文, 横位ケズリ痕がわずかに残る
ほどのナデ整形

備考：断面黒色

第14図 2号土坑出土土器 (1/5)

に細砂粒を含み、1は裏面灰褐色・2は赤褐色を呈する。3は爪形押圧部分の小片で弧状に施文された小片であり胎土に長4mmの砂粒を含み赤褐色を呈する。5は無文浅鉢形土器の口縁であり表裏ともに横位のヘラ磨きを施しており、胎土はこまかく微石英を含み明褐色を呈する。8は内反する薄手無文土器の口縁部であり内側への折返し口縁で、剥離の著しい暗褐色土器片である。1は前期初頭、2は前期中葉、3・4は中期中葉、5～7は中期後半、8は後期初頭である。4は弧状隆帯部を含む胴部片で胎土に石英粒と黒雲母を大量に含み暗褐色を呈する。6・7は単節斜行縄文を持つ厚手の胴部片であり、胎土に細砂粒を含み明褐色を呈し、8には磨消し無文部がある。

2号土壌 (第13図)

位置：第8地点調査区北東部B4区に位置する。

覆土：土壌底から壁面沿いに黒褐色土層が堆積し、最初の自然堆積層を形成する。その上部にローム粒子を含んだ暗褐色土層があり土壌内覆土の大半を占める。この層内に厚さ16cmの堆積が浅く外方に伸び、これらは耕作土によって覆われる。

形態と規模：この土壌は複合土壌と考えられ、円形底部平坦な土壌がまず作られた。この土壌掘方上面の径は108×110cmであり、底面径は72×74cmで、その深さは44cmである。この堆積土内中央部を中くぼみにし、そこから円形土壌の外方に約70cm浅くのびる付属部が後に上部土壌として作られた。主軸はN-32°-Wで、壙底実高は20.2mである。

遺物出土状態：土器片60片と複合可能な土器2個体が出土した。このうち下層から、胎土に植物繊維を含む条痕文・無文土器23片が出土した。上部土壌下面から斜位に置かれた称名寺式深鉢形土器が、また無文碗形土器がその上部から出土した。その上部覆土から土師器1・須恵器2片が出土した。上部土壌は縄文後期初頭の称名寺式期のものであり、下部円形土壌は称名寺期以前であることはたしかであるが縄文早期末の可能性はあるとしても時期を限定し得ない。このほか先土器時代に属する石器・砥石・黒曜石各1点が覆土中から出土した。

出土遺物：(第14図1・2)・(第17図9～22)：9～13は条痕文系土器片である。図示以外に胎土に多量の繊維を含む土器18片があり、そのうち条痕文をもつ胴部6、無文のもの12片でそのうち尖底に続く破片1がある。9は尖底土器口縁部片で、口唇部に3条の横位条痕が、その下部には緩斜位条痕が表裏共に施され暗褐色を呈する。10以下は胴部片で、斜条痕文をもつ10～12と無文の12・13があり、暗褐色を呈するものと赤褐色のものがある。14は口縁部に刻目をもち平行沈線による施文をもつ口縁部片である。胎土に細粒を含み、表面は赤褐色を、裏面は灰褐色を呈する。1は茅山下層式に、9～13は早期後半の茅山系土器群に、14は早期最末期の東海系土器である。15は斜行単節縄文LRをもつ胴部片であ

るが、胎土に植物繊維を大量に含みもろく表裏共に灰褐色を呈する。前期初頭～前半の一群と言える。16～21は中期後半～末の土器群である。16は深鉢形土器口縁片で、無文唇部・沈線・斜回転Rの縄文をもち胎土に細粒を含み明褐色を呈する。17は頸部から胴部にかかる部分で、頸部無文帯の1部が残り、地文の縄文を磨消し縦長区画文を作る。胎土は16と同様で赤褐色を呈する。18・19は接合しないが同一個体で、半裁竹管状工具で縦位の条線を表出したのち3本の沈線で弧線文を表出し連弧文を作る大形土器の胴部である。胎土には細砂粒のほか金雲母が認められ、褐色を呈する。20は単節縄文をもつ胴部片で、胎土に砂粒を多量に含み2次的な火を受け黒褐色。21は隆帯と沈線・無文部の胴下半部片で、胎土に微砂を含み明褐色を呈する。22は磨きの見られる無文浅鉢形土器の底部片で、底径10.6cmである。胎土に細砂粒及び貝粉状物質を含み赤褐色を呈する。図示した以外に中期後半～後期初頭と見られる微細片12と土師器・須恵器細片各1が出土した。

3号土壙（第12図）

位置：調査区東北部A4区に位置し、西に1号土壙・東に2号炉穴が位置する。

覆土：土壙内下部に黒褐色土層が、上部にローム粒子を含む暗褐色土層が堆積する。

形態と規模：長円形土壙であり、掘方上面の径は88×78cmで、壙底はゆるい摺鉢状を呈し深さは24cmであり、壙底の実高は19.56mである。

遺物出土状態：土器片3片が流入の状態で覆土内から出土した。縄文早期末の条痕文土器細片1と中期の阿玉台式土器片が覆土下層から出土したのみで土壙の時期は不明。

出土遺物：いずれも微細片で、無文部であるが1片は胎土に植物繊維を含む処から早期末に、1片は胎土に大量の金雲母を含むことから、阿玉台式に比定され、他の1片は時期不明である。

4号土壙（第12図）

位置：調査区C4区にあり、東南の2号土壙・西北の13号住居址の中間に位置する。

覆土：土壙底下半にローム質褐色土層がまず堆積し、その上部東よりに焼土まじりの褐色土層・西壁寄り黒褐色土層・中央に黄色の濃い褐色土層が堆積する。この上部に表土に近い組成の土層があり土壙内覆土の上層をなしている。

形態と規模：長円形の土壙で、掘方上部の長径96cm・短径75cmで、底部は平坦で長径75cm・短径50cmで、主軸はN-45°-Wである。深さ62cmで底の実高は20.8m。

遺物出土状態：ローム質褐色土層から土器細片2、石屑片2が出土したのみである。この土器が共に胎土に植物繊維を含むことから、早期末の土壙である可能性が高いが断定できない。

出土遺物：出土した2片はいずれも無文の細片であり、胎土に大量の植物繊維を含み暗褐

色を呈する。条痕文系（汎茅山式）土器群に属することは確かであるが細分は不可能である。

5号土壌（12図）

位置：調査区A 1区南壁に接して見出されたもので、南半部は調査区外であり未掘である。

覆土：下層は黒褐色土層で、上層はローム粒混りの暗褐色土で、厚さ60cmの表層が覆う。

形態と規模：半掘であり平面形不明。長軸 140cm深さ20cmの土壌底に 2本の柱状遺構を伴うもので、大形のものは底部18cm墳底平坦部からの深さ38cm、小さいものは浅く柱状窪みであり深さ28cmである。墳底に柱状遺構をもつもので第8地点唯一のもの。

遺構出土状態：土器細片 4 が流入状態で出土したのみであり、土壌の時期は不明。

出土遺物：（第17図23～25）：23・24ともに斜位の単節縄文をもつ胴部片であり、胎土に少量ながら明瞭に植物繊維を含み、裏面は灰褐色を呈する。23はL R施文で表面褐色を呈し、24はR L施文で表面赤褐色を呈する。25は厚手の胴部片で地文に条線を施し、その上に 2条の沈線による弧線が描かれており、胎土に細砂粒を含み褐色を呈する。23は前期初頭、24は前期前半、25は中期後半の加曽利E式に伴う連弧文系土器と見られる。図示以外のものは無文部細片で赤褐色を呈するが時期不明である。

6号土壌（第12図）

位置：A 1区にあり、南東 1.6m に 5号土壌・西 4.5m に 7号土壌がある。

形態と規模：楕円形の深い土壌である。掘方上部の長径88cm・短径76cmで、深さ 104cmで底部は平坦であり、長径74cm・短径58cmで、主軸はN-8°-Eである。

遺物出土状態：覆土下層から縄文土器細片 5 が出土した。これらはいずれも中期後半と後期初頭であり、限られた時期を示すことから、中期末頃の土壌である可能性が高い。

出土遺物（第17図26・27）：26は単節縄文でL R施文され、縄文の単位の細かい胴部片で、胎土に砂粒と若干の繊維を含み明褐色を呈し前期前半のものであろう。27は頸部から下半部に移行する。部分の破片で地文のR L施文の縄文を 2条の沈線間を縦位に磨消したもので、胎土には砂粒を含み明褐色を呈する。加曽利E期内のものである。図示以外の 3片はいずれも無文細片であるが 1片は胎土に繊維を含み、 1片は磨きのある口縁片で、各々早期末と中期末のものと思われる、他の 1片は時期不明の微細片である。

7号土壌（第15図）

位置：B 1区見出されたもので、西に 8号・西北に 9号土壌が 2m 離れて見出された。

覆土：下層は黒褐色土層で上層はロームブロック入り暗褐色土層である。

形態と規模：長円形土壌であり、掘方上面の長径 118cm、短径 106cmで、底は平坦で底の長径 109cm、短径84cmで、深さは24cmである。

遺物出土状態：覆土下層から先土器時代の石器 1・黒曜石片・土器 8 片が流入状態で出土した。土器は早期末・前期前半・中期末であり、土壌の時期は不明である。

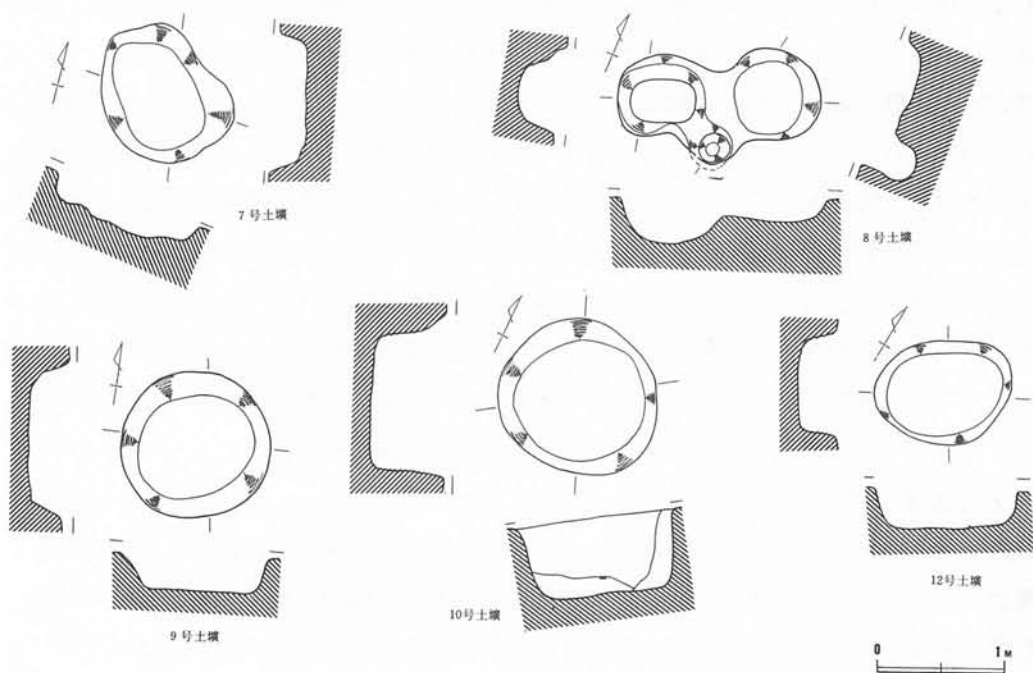
出土遺物：(第17図28～33) 28は尖底深鉢形土器の底に近い無文土器片で繊維を多く含み表面褐色・裏面暗褐色を呈する。29は磨滅著しいが縄文をもち胎土に若干の繊維と砂粒を含み灰褐色を呈する。30・31は隆帯文をもつ類で、30は口縁部片で突帯文のまわりに沈線がめぐる。31は渦状隆帯文をもち隆帯中央と器体に引き押しの刺突文が見られる。30・31ともに胎土に砂粒と多量の金雲母を含み暗褐色を呈する。31は縦位の沈線文をもち器外面が磨かれた焼成良好の土器であり、胎土に石粉を含む焼成良好である。33は無文厚手の土器で浅鉢形の胴下半部で赤褐色を呈する。図示以外の 3 片はいずれも無文胴部細片であり内 1 は繊維を含み、底に近い細片である。28は早期末に29は前期に30・31は阿玉台式に32・33は中期に比定できる。

8号土壌 (第15図)

位置：東に7号・南に9号土壌が接する土壌群中の一つである。

覆土：複合土壌中の深い部分では暗褐色土層が、その上層及び浅い不整形部分ではローム粒子混りの暗褐色土層がおおっていた。覆土観察不十分の土壌である。

形態と規模：平面不整形の複合土壌である。深い2つの円形土壌と浅い長円形土壌の複合である。通しての土壌上面の長軸 148cm であり、長円形土壌は長径70cm・短径62cmで底



第15図 土 壌 2 (1/60)

2) 土壙とその出土遺物

はすり鉢状で深さは20cmである。円形の深い土壙は上面径28cmで中ふくらみで底は丸く深さローム上面から38cm、浅い土壙から深さ24cmである。

遺物出土状態：土器細片8片が出土した。このうち条痕文土器口縁が円形中ふくらみ土壙下層深い位置から出土したほか、層位的出土状態の区分が不明確である。

出土遺物（第17図34～35）：34は表面に斜位条痕文をもち裏面無文で胎土に繊維を多量に含む尖底深鉢形土器の口縁部片で褐色。35は表面が無文・裏面に条痕文をもつ胴部片で胎土焼成とともに33と同様である。36は地文に縄文をもち沈線文で直線と弧を表出した内面平滑の薄手の胴部片であり、称名寺期に比定できる。図示外は無文細片である。

9号土壙（第15図）

位置：B 2区に見出され、北に8号・西に10号土壙が近接する。

覆土：自然堆積による壙中央へ傾斜した下層は黒褐色土層で上層はロームブロック入り暗褐色土層であり、中央部での下層の厚さは18cmであった。

形態と規模：長円形土壙であり、上面の長径 116cm、短径 114cmで、底は平坦であり、その長径88cm、短径80cmで深さは30cmであった。

遺物出土状態：計13の土器片がすべて流入状態で出土したが、このうち下層からは連弧文土器を含めて6片が出土した。下層からは胎土に繊維を含むものの細片5が出土しており、土壙の時期は不明である。

出土遺物（第17図36～38）：36は表面条痕文、裏面無文。37は表面無文、裏面条痕文の胎土に繊維を多量に含み表面褐色、裏面暗褐色である。この類の細片が図示以外に4片ある。38は縦位に粗い条線をもち上端と下部に沈線による連弧文の1部が見られる中期後半の胴部片である。他に細片8片があるがそのうち1片は胎土に砂粒と金雲母を多量に含む阿玉台式の無文小片である。

10号土壙（第15図）

位置：3 B区の土壙密集部にあり、東・西に 1.5m へだてて11・13号土壙がある。

覆土：土壙底南寄りを中心として北と南では覆土の堆積が異なる。北壁からはゆるく傾斜し南壁からは急傾斜で堆積した暗褐色土層が下層をなし、ロームブロック入り暗褐色土層が厚く堆積して上層を形成する。

規模と形態：長円形の深い土壙であり、土壙上面の長径 128cm・短径 108cmで、壙底は水平であり、その長径 102cm・短径97cmで、深さは62cmと深く底に工作痕はない。

遺物出土状態：チャートと黒曜石の石屑2点と土器片18・土錘1・条痕文土器・勝坂式土器片・後期の土器が含まれ、土壙の時期は決められない。

出土遺物（第17図39～42）：39は表裏ともに条痕文をもち、繊維を多く含むもので、この

類は他に3片ある。40は表裏共に無文で円点状剥離の著しい胴部片で磨きはなく表面褐色・裏面赤褐色を呈する。41はLRの単節縄文をもつ胴部片で薄手で胎土に細砂粒を含み表面暗褐色・裏面明褐色である。42は土錘で、無文へら磨きある土器片を用いたもので、刻目ある方を長辺とし径32mm・短径28mmの品である。他に勝坂式細片1と小片10片がある。

11号土壌

位置：4B区にあり、1.5m東に第10号土壌がある。

覆土：残念ながら分層が不十分であった。覆土確認ではローム粒入暗褐色土であった。

形態と規模：不整形土壌であり、南西～北東を主軸とし、くびれの見られる浅い土壌である。土壌上面の長径86cm・短径64cmであり、壙底長径30cm・短径24cmで、底は平坦でなく中くぼみである。深さは12～20cmと浅く一定しない。

遺物出土状態：覆土（分離できず）から磨耗著しい土器細片12片が出土した。早期末の無文土器や中期片を含むことから、土壌の時期は特定できない。

出土遺物：磨滅した細片12が出土したがほとんど無文である。

12号土壌（第15図）

位置：2B区にあり、西に10号・南に7号土壌が約3m離れて存在する。

覆土：覆土の分層は不十分であるが暗褐色土層が中くぼみに上下2層に区分される。

形態と規模：長円形土壌であり、主軸はほぼ東西で土壌上面の長径110cm・短径80cmで、底は、ほぼ水平であり長径90cm・短径72cmで深さは36cmである。

遺物出土状態：縄文式土器片5が、いずれも下層から出土した。

出土遺物（第17図43～46）：43は表面斜位・裏面横位の条痕文をもつ繊維土器片である。

44はRLの斜縄文をもつもので表面褐色・裏面灰褐色の低温焼成の土器で前期前半のもの。

45は斜位の粗い撚糸文をもつ胴部片で胎土に細砂粒と微量の金雲母を含み焼成堅く褐色を示す。46は表裏ともへら磨きされた無文部分の口縁片で厚手である。他に中期片1がある。

13号土壌

位置：2A区南縁にあり、土壌の南半の大部分は調査区外のため未調査である。

覆土：土壌覆土は4層に分かれ、凹凸をなす壙底基部壁寄りが最初の堆積層で、この上に中央部で8cm東上に土壌内浅いくぼみ基部に次の自然堆積があり、その上部に底面中くぼみのローム粒子暗褐色が堆積する。壙内最上部から土壌確認面より上にのびる上部堆積層はその上面が攪乱されていた。土壌確認面は地表下66cmである。

形態と規模：上壙の平面形は大部分未掘のため不明。土壌底は平坦でなく、壁面観察では深い部分の壙底の深さは20cmであり、東側の浅い平坦面の深さは10～12cmである。

遺物出土状態：縄文土器12片が出土したが、うち7片は下層出土であり、押型文土器片と

条痕文土器片はこのうちに含まれ、早期の土壌である可能性もある。

出土遺物（第17図47～54）：47は押型文土器の口縁部片であり、密接な山形を横位回転させたもので、口縁上面にも山形押型文が施されている。胎土に砂粒を含み焼成は固く表面は鉛黒色で、無文の裏面は赤褐色を呈し、撚糸文段階の押型文土器である。48は条痕文土器の口縁部片で、表面は口唇部に横位・下方に斜位の条痕が施され、裏面口唇部に横位条痕・下部は無文であり、胎土に多量の繊維と砂粒を含み暗褐色を呈する。49は表面に縦位条痕をもち、胎土・焼成は48と同様である。50はR Lの単節縄文をもつ胴部細片で若干の繊維を含み断面灰褐色を呈する。51は縦位の粗い撚糸文をもつ胴部片で胎土に石英粒を含み表面赤褐色である。52は文形深鉢形土器の口縁部文様帯部片であり、地文に粗く太い条線を施し沈線と隆帯で区画文を作り、隆帯文内に沈線をもつ厚手で胎土に砂粒を多量に含み褐色である。53は粗い縦の条線をもち胴下半部で52と同一個体の可能性がある。54はR Lの縄文を地文とし沈線を施し、沈線間を磨消した薄手の土器で後期のものである。このほか早期末の無文繊維土器片2と後期の細片1が出土した。

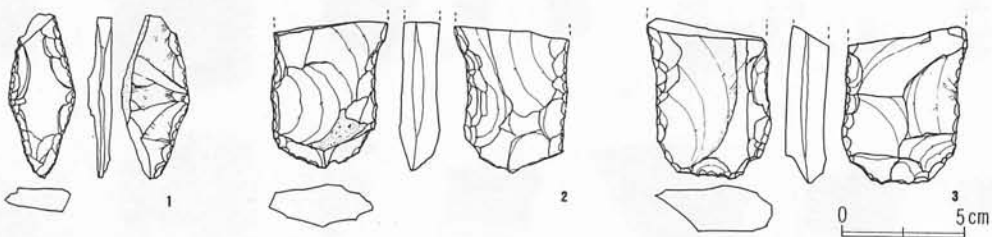
14号土壌

位置：4 C 区にあり調査区西端にあり他の土壌から3 m 離れている。

形態と規模：長円形の土壌で南北に長く、土壌上面の長径92cm・短径70cmである。底は中すばみである。

遺物出土状態：下層から石斧1・縄文土器片5・集石126 個が出土した。

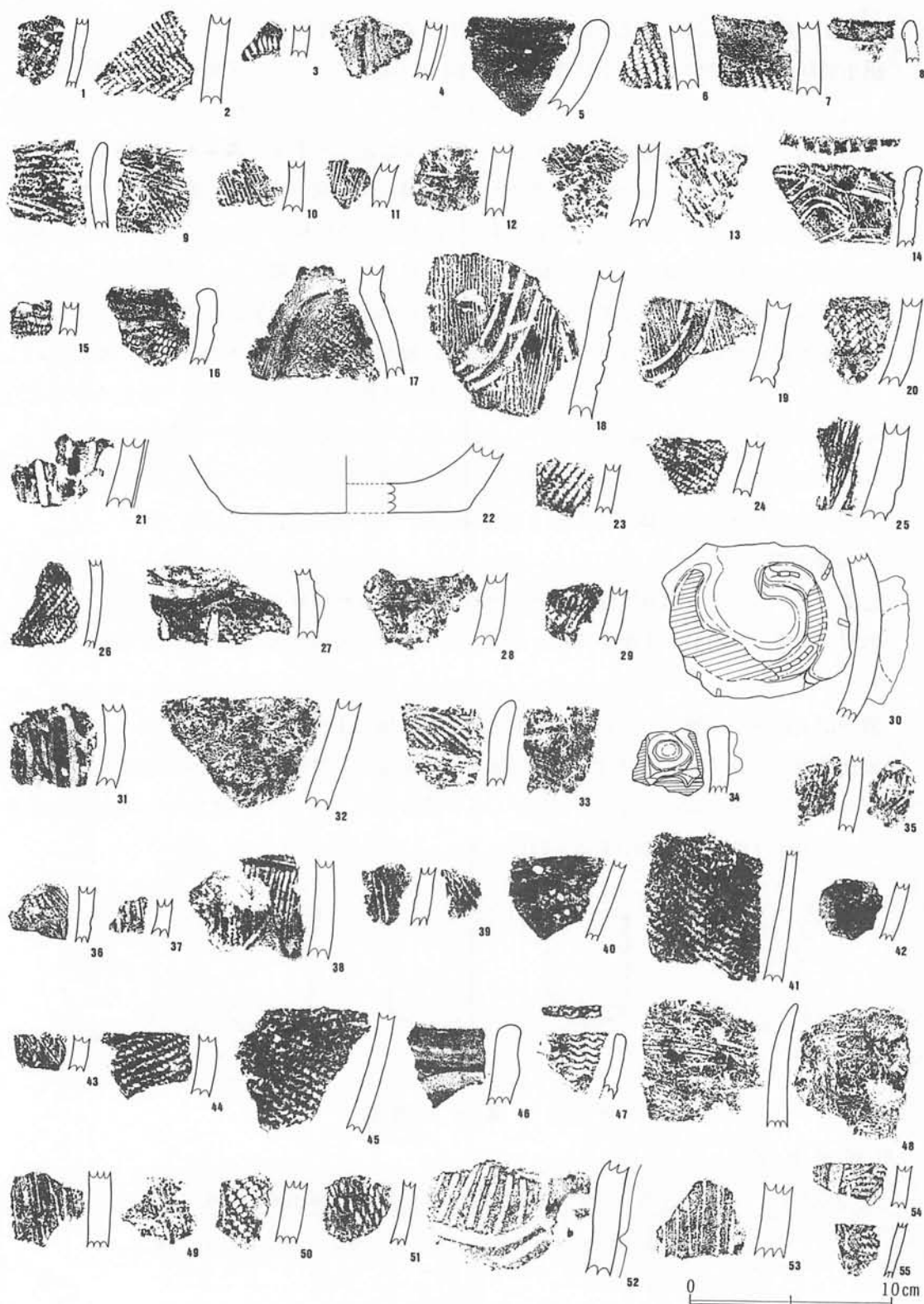
出土遺物（第17図55）：55は細い縄文地をもつ胴部片で竹管による沈線の痕跡が認められ、極めて薄手（厚さ4mm）で表面灰褐色でもろい焼成である。なお裏面に磨きはない。図示外の他の1片は無文厚手の中期の土器片である。



第16図 土壌出土石器 (1/3)

石器観察表

図番	種別	出土土壌	石質	遺存状態	重量 g	自然面の有無	備考
第16図 1	尖頭器	14号土壌	頁岩	完形	21	右側縁に一部有	両面調整されている
2	打製石斧	〃	砂岩	上半分欠	(66)	有	短冊形
3	〃	13号土壌	〃	〃	(73)	無	〃



第17図 土 壙 出 土 土 器 (1/3)

3) 炉穴とその出土遺物

1号炉穴 (第18図)

位置：調査区北東部D 2区に位置する。13号住居址のすぐ東側に位置している。

覆土：3はロームブロックを含む黄褐色土。2は焼土で厚さは5～10cmである。

形態と規模：長径 3.4m，短径 1.9m の長楕円形を呈する。ローム面において明確に確認された。深さ30cmである。

出土遺物：全く遺物は出土していない。

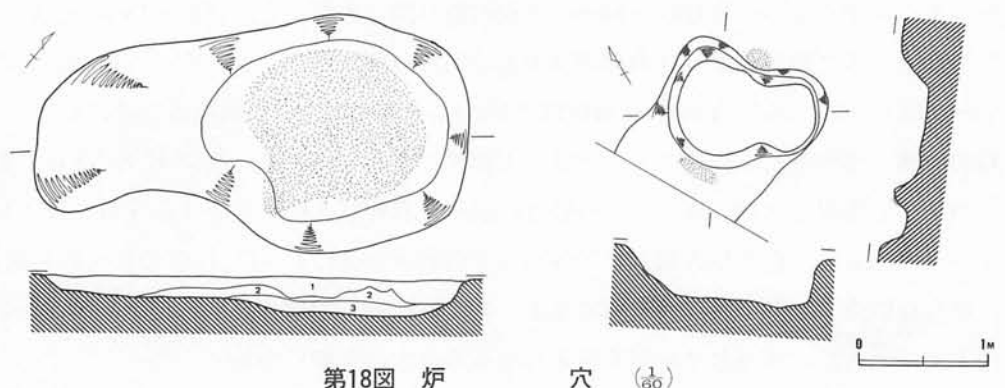
2号炉穴 (第18図)

位置：調査区南西部A 4区に位置する。西側が調査区域外にかかる。

覆土：下部はロームブロックを含む。褐色土層を主体としている。

形態と規模：長径 1.5m，短径 0.9m の楕円形を呈するが，掘り込み全体の形状は西側が調査区域のため不明確である。焼土は2カ所存在し，堆積は薄い。全体の深さは35cm。

出土遺物：出土遺物はわずか9片だけであったが，図示できたのは4点だけである。(第19図1～4)。1は縄文を地文として，胎土に繊維を含む。焼成は良好。2は縄文による文様帯が施され，内面はよく研磨されている。胎土に小礫を含み，焼成は良好である。3は平行集合沈線が描かれ，胎土に小礫を含む。焼成は良好。4は単節の縄文が羽状に施され，胎土に小礫を含む。内面はよく研磨され，焼成は良好堅固。



第18図 炉 穴 (1/60)



第19図 2号炉穴出土土器 (1/3)

4) 掘立柱建物柱穴群

掘立柱の柱穴群が48本以上見出された。また、この柱穴群密集地域に古代の須恵器・土師器片52片が出土した。柱穴内出土品ではないが一括して記述する。

遺 構 (第20図)

位置：調査区内 2A～C・3A～C区に集中して屋外柱穴群が見出され、このほか 1A・1C区でも若干の柱穴が見出された。これら柱穴群は調査区南壁に柱穴のなかばがかかるように、柱穴群は 2A・3A区から更に南に続くことは確実である。調査区の柱穴検出はコボウのための深掘り痕が東西に約30cm間隔で走るために困難を極め、脱漏の可能性を否定し難い、というよりかなりの脱落があると推定される。

柱穴確認面と覆土、現在の耕作土層の下方の薄い包含層（約10cm）内で柱穴上面を確認した。包含層はなお 5～10cm堆積しローム層上面に続く。このことは、縄文土器片を含む包含層（当時の表層）からローム内に掘込まれた柱の痕跡であることを示す（第20図）。

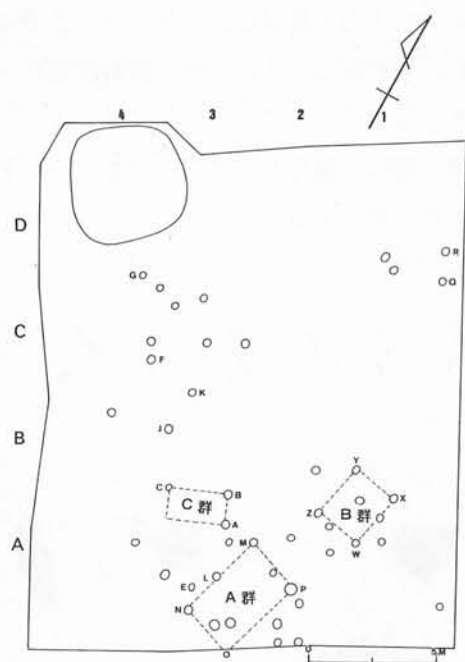
柱穴内覆土は、ローム粒入り暗褐色土層で、その下部は湿気の多い暗～黒褐色土層であり分層不能のものが多かった。

柱痕跡の状態を21号柱穴址に代表させて記すことにする。柱痕確認上面（掘方）径は、39×35cmであるが、12～18cmで壁面垂直の真柱部分に至り、この部分の径は16～18cmであり、打込まれた柱の径は18cm以下と推定される。見出された柱確認面の径は20～40cmと多様であるが垂直部分の径は12～14cmの比較的細い類（A類）と、径16～18cmの比較的太い類（B類）の2種がある。柱の深さは現象的には多様であり、確認面から14cmのものから58cmの間で多彩であるが柱痕底の海拔高で見れば、近接するものに海拔高の近いものが多い。

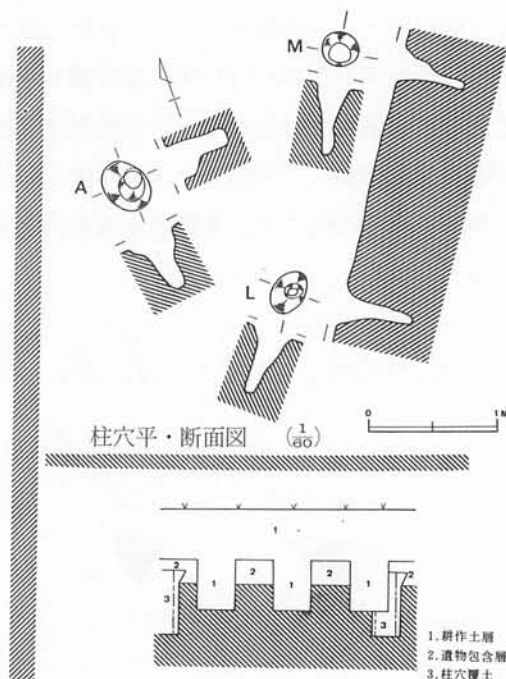
柱の配置：建物配置を復原することは、①複雑に復合すること、②ゴボウ用深耕による攪乱のため、容易でない。A～Cは柱底 24.25m・真柱径A群としてまとめ、D・Eらは実高24・15mの1群で径A類、F・Gらは実高24.05m級、J～N、QRのように海拔高24mに達しない深い1群で柱径はB類である。多くは柱として確認し得たが、建物としては復原不能であった。辛うじて配置を推定しうるのは次の3棟である。

A群はL～Pによって作られる1間×2間のもので、柱径16～18cm深さ45cm前後の6本（内1本は調査区外）で作られ、桁行392cmであり、2cmであり、桁行はN—15°—Eである。B群はW～Zによって組まれる1間×1間のもので、柱径16～18cm深さ32～34cmの柱4本で作られ桁行238cm・梁間192cmで、桁行はN—18°—Eである。C群はA～Cの柱と攪乱部分の柱で構成され、桁行236cm・梁間124cmで主軸はN—52°—Wである。

いずれも居住用建物ではなく倉庫的な性格をもつ小屋であろう。



第20図 掘立柱建物柱穴群 (1/300)



柱穴断面模式図

遺物

柱穴群密集地周辺から須恵器・土師器・かわらけ・磁器片61片が出土した。

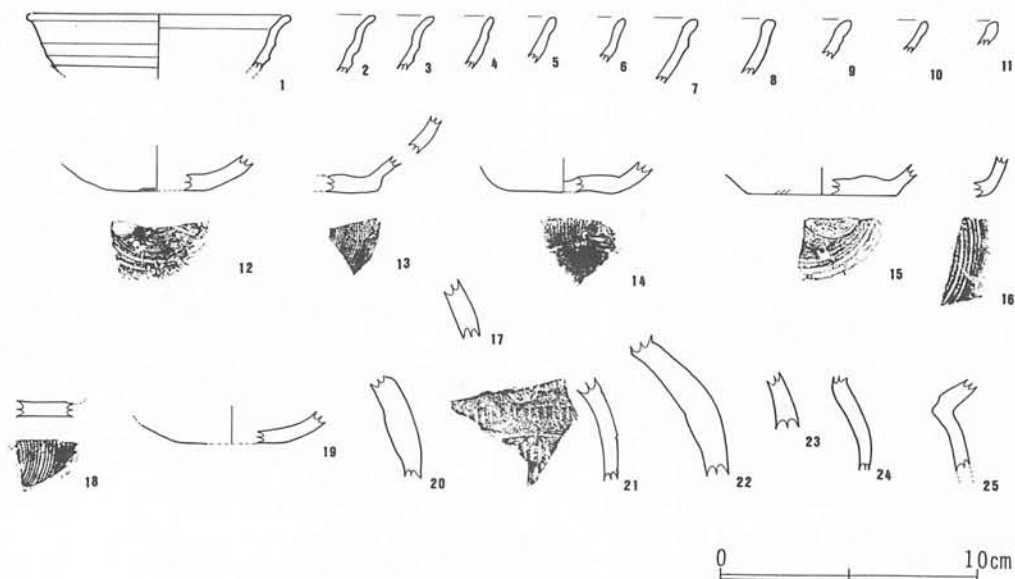
須恵器 (第21図 1～23)

総計41片が出土したが、小形坏が最も多く口縁部片10。胴部片12。底部片10である。1～11は口縁部片であり、1～3のように口唇端部が外方にめくれたものと、素口縁のものがある。唯一の複可能品の口径は10.4cmで小形浅目の坏であり、内外面に細いロクロ目痕をものほか、外面にへう割り痕を残す。13上は体部片で、12～19は底部片でいずれも底に糸切り痕をもつものである。底の厚さは3～6mmで底径は、44mmから6cmの間のものである。胎土には微細粒を含み、白色針状物質は認められず、焼成良好でねずみ色を呈するものが多く、13・18は赤紫色がかった褐色である。

壺・甕類の胴部片は9片あり、21は外面に叩きによる縄蓆文が施さるが、他は無文である。20・22は中～大形壺の頸部に近い胴部片で、胎土に細細粒と白色針状物質を含み器外面に自然釉が吹き出し、焼成極めて堅密である。22～24はねずみ色を呈し焼成良好である。19は明褐色を示す焼成不良のものである。須恵器はいずれも国分期のものであるが細分は困難であるが、強いて言えば9世紀前半を主体とし、1・2のように口唇端が外に張るもの

は9世紀後半の可能性が高い。出土須恵器のうち大形壺形土器は白色針状物質を含むことから、鳩山窯を含む比企丘陵の窯址群で生産され、小形杯など大部分は本遺跡周辺の2市2町などで生産されたものの可能性が高いといえよう。

土師器 (21図25) 図示した1片を除く11片は無文胴部の細片であり、25は頸部から胴部上半にかけての破片で、微細粒を含み内外面ともに赤褐色を呈する。



第21図 掘立柱建物柱穴周辺出土遺物 (1/3)

5) 遺構以外の場所から出土した遺物

今回、これまでに列記した遺構以外の場所から出土した縄文時代の土器・石器・土製品の順で報告していきたい。(第22～27図)

土器

第8地点での遺構外から検出された資料はほとんど破片化したもので完形品は全く認められなかった。土器の出土層は、表土層や攪乱層からのものも含め、今回の調査区域内の自然堆積土中から検出されたものを中心としてとりまとめ 235点を図示し紹介する。また土器の分類は文様の構成とその構成要素等から5群に分類した。

第Ⅰ群土器…早期末条痕文系土器

第22図, 第23図 1～12

第Ⅱ群土器…前期前半繊維縄文土器, 前期後半竹管文系土器

第23図13～18

第Ⅲ群土器…中期前半・中葉(阿玉台・勝坂式)

第23図55, 第24図 1～5

第Ⅳ群土器…中期後葉(加曽利E式)

第23～26図 1～23

第Ⅴ群土器…後期(称名寺・堀之内式)

第26図24～49

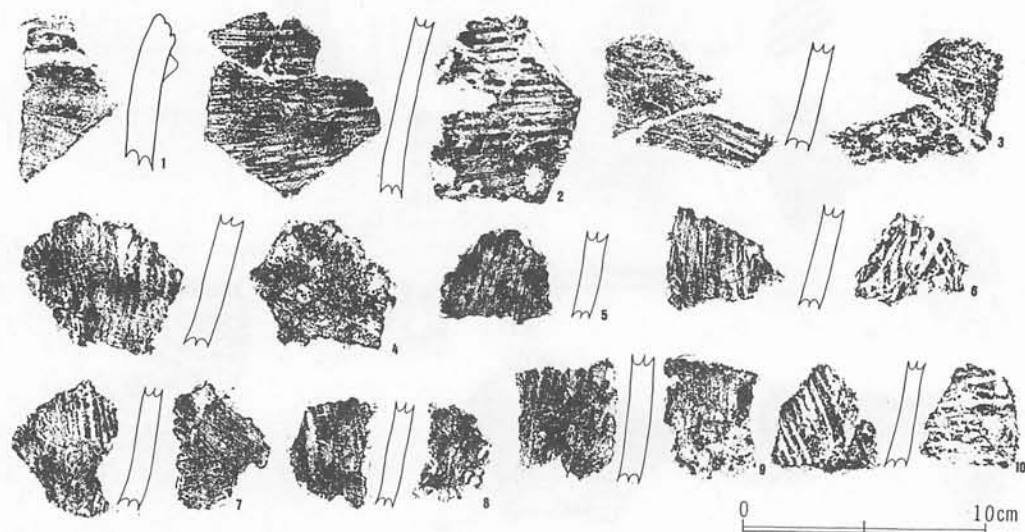
石器

遺構外出土石器の種別では、石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・スクレイパー及び剥片がある。石器製作時に出土と推定される剥片類を除くと、石器は総計23点を数えることができる。

土製品

検出された土製品は、土製円盤(第27図24)と手づくねの小形土製品(第27図25)である。

土製円盤は土器の一部を利用した二次加工品である。直径3.3cm, 重さは11g

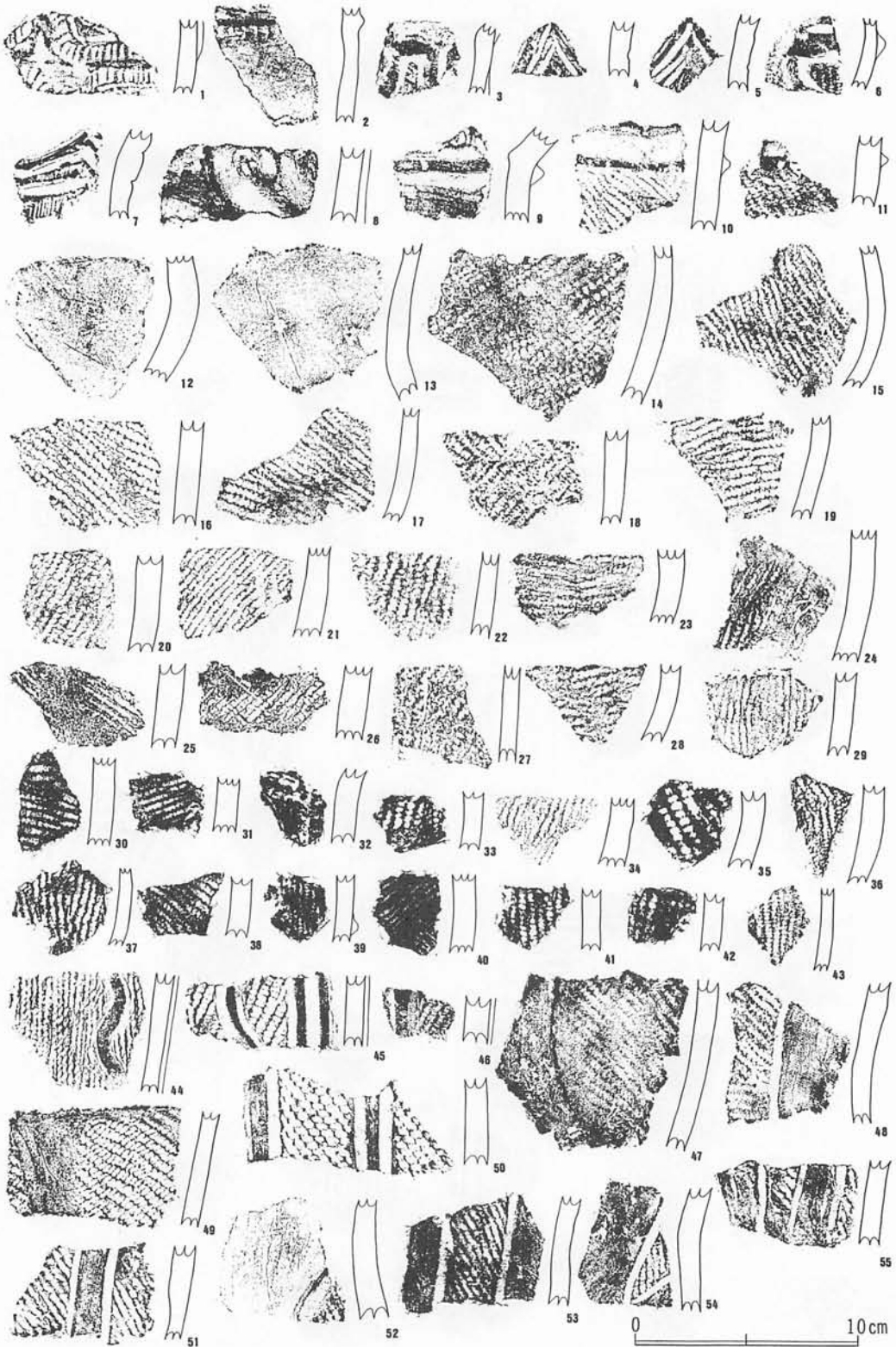


第22図 遺構外出土土器 (1/3)

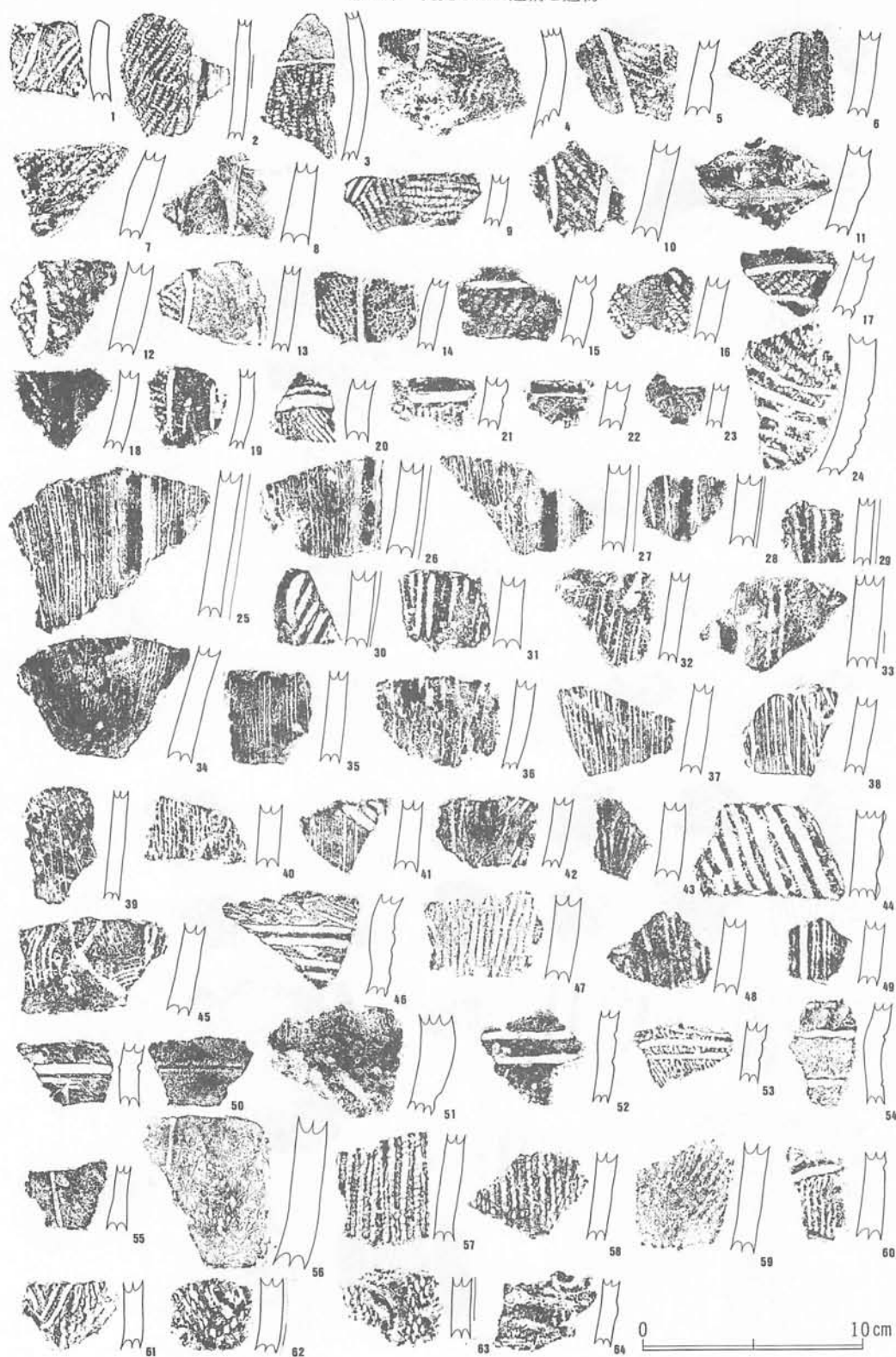


第23図 遺構外出土土器 2 (1/3)

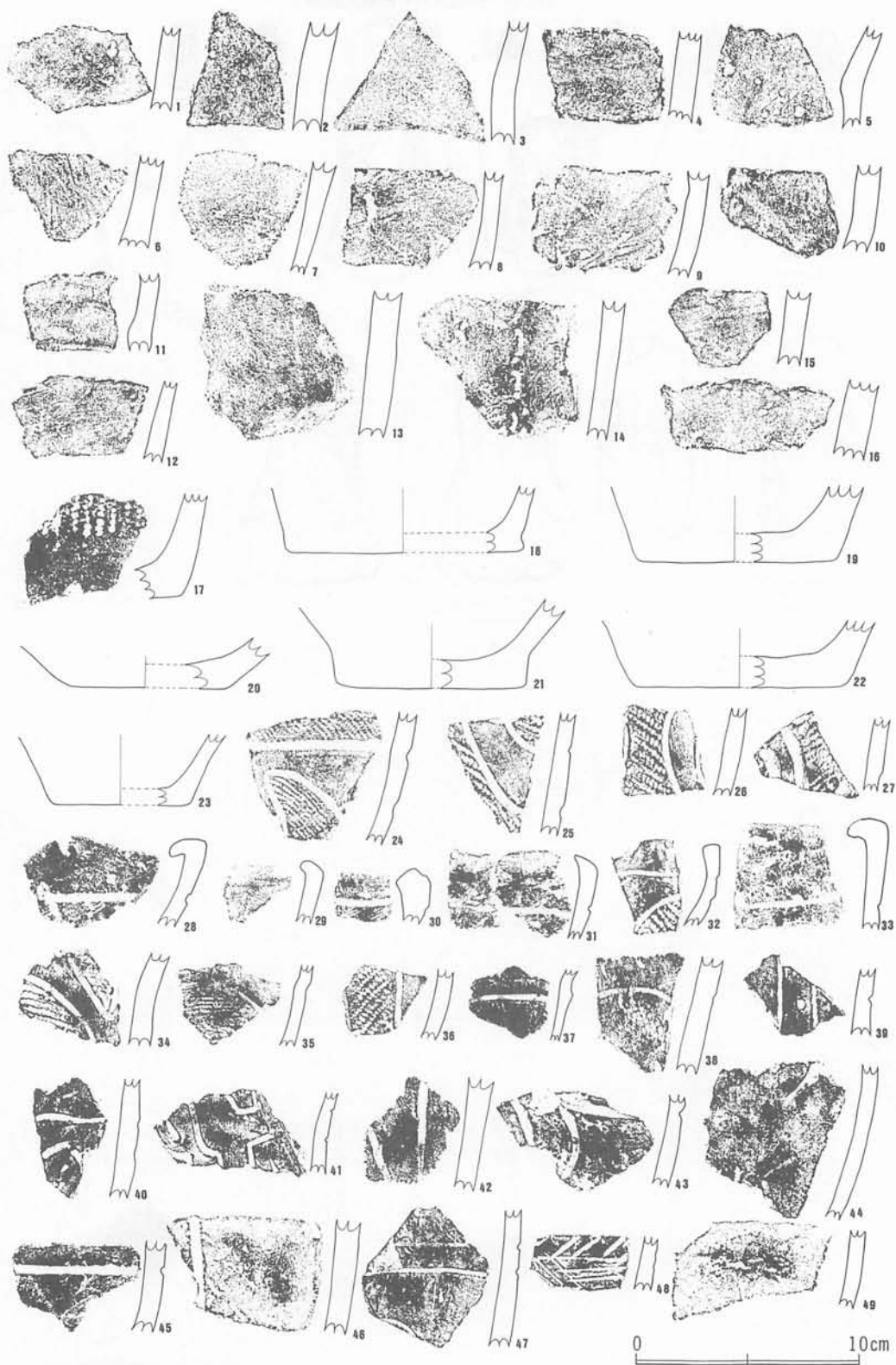
5) 遺構以外の場所から出土した遺物



第24図 遺構外出土土器 3 (1/3)

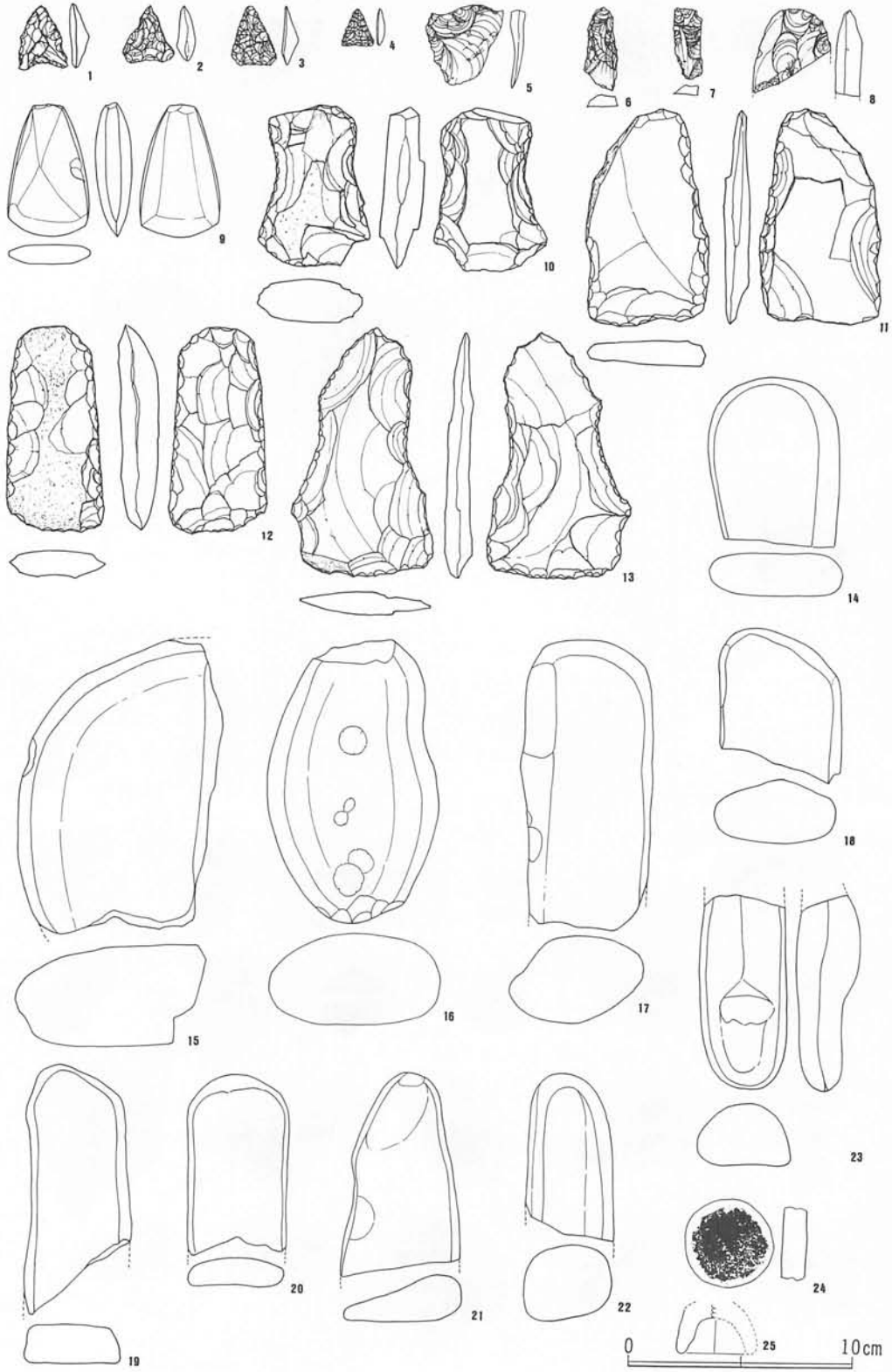


第25図 遺構外出土土器 4 (1/3)



第26図 遺構外出土土器 5 (1/3)

第3章 発見された遺構と遺物



第27図 遺構外出土遺物 (1/3)

石器観察表

図番	種 別	石 質	遺存状態	重量 _g	自然面の有無	備 考
第27図 1	石 鉄	チャート	完 形	3	無	両側縁が心もち外側に向かって弧を描き尖頭部をつくりだしている
2	〃	〃	〃	4	〃	両側縁が内側に向かって若干弧を描き鋭い尖頭部を形成する
3	〃	〃	両脚部欠	(2.5)	〃	基部が直線的
4	〃	〃	左脚部欠	(1)	〃	着装部が直線的である。
5	スクレーパー	黒 曜 石				両側縁に調整がなされる
6	剥 片	〃		2.5	〃	縦長剥片で左側縁に鋸歯状の刃部がつく出されている。
7	〃	〃		5	〃	縦長不整剥片
8	削 器	チャート	上半分欠	(16)	〃	表面に研磨面をもつ、側縁の刃部は片面調整されている。
9	定角式磨製石斧	輝 緑 岩	完 形	56	〃	全面に研磨がいきとどいている。
10	打製石斧	砂 岩	〃	88	〃	分銅型を呈する。
11	〃	〃	〃	86	〃	非常にうすい剥片を利用したもの。
12	〃	〃	〃	96	有	表面に自然面を残す短冊形。
13	〃	頁 岩	〃	105	無	表面と側縁の一部に研磨がみられる。
14	磨 石	砂 岩	下半分欠	(158)	〃	入念に研磨されている。
15	〃	石英閃緑岩	完 形		〃	側縁に打痕がみられる。
16	〃	〃	〃		〃	両端に打痕がみられる。
17	敲 石	砂 岩	基 部 欠	(427)	〃	全体に研磨されている。
18	磨 石	緑レン石片岩	下半分欠	(166)	〃	側縁がよく研磨されている。
19	敲 石	チャート	半 欠	(138)	有	側縁に未研磨の部分を残す。
20	〃	砂 岩	下半分欠	(80)	〃	表面、側縁が研磨されている。裏面は偏平。
21	〃	〃	半 欠	(155)	〃	全体に研磨されている。
22	〃	〃	〃	(124)	無	全面に研磨
23	〃		〃	(141)	〃	全面に研磨

第4章 まとめと今後の課題

1. 第8地点調査のまとめ

第8地点は東台遺跡の西北部(第3図参照)にあり、かつ砂川堀崖面に近接する。調査によって、大要次の事実が知られた。

A遺構：竪穴住居址1軒・炉穴2基・土壇14基・掘立柱建物址3棟。

B遺物：先土器時代の石器1点、縄文土器完形または復元可能な土器5個体と1,174片・縄文時代の石器32点・土製品3点が出土した。その他に被熱した礫多数が出土し、平安時代の土師器片7点・須恵器片32点。中・近世の陶磁器類が出土した。

C住居址：平面形は隅丸台形の竪穴住居址であり、長径460cm・短径450cmであり壁溝は伴わない。中央やや北寄りに石囲い炉があり、その中に炉体土器をもつものであった。南壁に接して埋設土器(埋甕)が見出された。炉と埋甕を結ぶ延長線上中軸線を対称にした4本の支柱穴と、炉を取り囲む柱穴群側柱、計13本の柱穴が見出された。南を入口とする住居構造がここでも追認された。本住居址は石囲い炉をもち、炉体、埋設両土器によってその時期は加曽利EⅠ新期のものである。炉体土器は中部から西関東に分布する曾利式土器である。埋設土器は武蔵野台地北東部に分布する土器であり、このことは土器分布を考察する際の第一級資料を加えたことになる。住居址内の覆土初期堆積面から出土した大形土器(第7図3・P13)が曾利系大形深鉢形土器であった事実も、前述した資料に加えて問題を深めるための好例となった。

D炉穴：1号炉穴は時期不詳。2号炉穴は縄文前期後半の遺構である可能性が高い。

E土壇：調査された14の土壇のうち、壇底に小柱穴など工作物の存在を示すものは見出されず、落し穴の機能を示す積極的資料は得られず、また土器を壇底に置いたものは見出されなかった。深い土壇の堆積土中にくぼみを作り下底を固めて称名寺大形深鉢土器を斜位に置いたものは埋葬用土壇としてよい。この土器の編年的位置は称名寺式土器を体系化した今村啓爾氏による「Ⅰ式b類」に分類され、以後著われた諸氏の論攷中でもほぼその編年的位置付けは一致をみている。本例に類似する文様体をもつ土器に千葉県金楠台遺跡第1号住居址埋甕がある。器形・文様帯ともに強い共通性が認められるが、相違点は本土器が「J」字状を呈するのに対し金楠台例は渦巻を構成し、また文様単位数も7～8単位に対し4単位、と異なる。渦巻文とJ字文とは恐らく系統を異にし、渦巻文は加曽利EⅣ式から称名寺式の古い段階のものにその系統性が求められる。それらが逆転する文様帯となる時、すなわち縄文部が返転する時には一つの大きな画期が考えられる。それ以前と次後と

では文様帯も異なる。すなわち、たとえば伊奈町志久遺跡第8号住居址出土土器と金桶台出土土器との間には大きな画期が認められ、また金桶台例と本例との間には時間的差異が考えられる。最近上福岡市川崎遺跡から出土した住居跡炉付近発見の一例は本土器の文様帯に称名寺式特有のスペード文が上下に挿入されるものであり、本土器に後続する例として興味深いだけでなく、ここにも一つの大きな画期が考えられる。以上、今村氏によって分類された「I式b類」には、①逆転文様帯による画期と、②スペード文上下挿入による画期、という型式学上重要な二大画期が想定されるのであり、今後の新たな資料の分析が望まれる。時期を明確にし得るものは2号土壇1例のみであるが、早期末の可能性あるもの3基のほかは、中期の可能性が大であった。第8地点の地域は竪穴住居の稀薄部であり、同時に土壇集中地区であったといえる。

F柱穴群：竪穴住居址に伴う柱穴群とは別に、柱が直線状に並ぶ傾向のある柱穴群3群が見出された。これら柱穴掘方の上面は表層より下位にあり近・現代の所産でないことを示し、覆土の状態が縄文期のものと異なり縄文期のものでないことを示す。東台遺跡では弥生期・古式土師器は全く見出されていない。柱穴址内覆土からの遺物の検出はないが、この柱穴群密集地域に国分期の土師・須恵器片の出土が多く、平安初期の倉庫的建物が存在した可能性がある。

Gその他の遺物：大量に出土したのは縄文時代の土器であるがC～Fにふれた以外の土器一破片として遺構に流入した覆土及び遺構外散布土器片について2点の特徴ある事実についてのみふれる。第1は、これまで大井町内で知見にのぼらなかった④押型文土器⑤条痕文に続く早期末の東海系土器⑥胎土に繊維を含み縄文をもつ前期初頭～前半の土器⑦竹管文盛行期である前期後半の土器⑧中期の土器の中に孔土器（酒造用説が有力）が発見されたことで注目すべき事実の一つである。第2は曽利系土器が13号住居址以外の今回の調査区域からも出土例が多い。東台遺跡では1～7地点の調査によってこれまでも、かなりの量の曽利系・連弧文土器の出土があり注目されて来たのであるが、炉体・埋（伏）甕土器に曽利式土器をもつ住居でのこれら土器の出土率は、遺跡一般での出土比率よりも多いという事実を認識したのである。縄文時代土器片のうち大部分は中期中葉から後期初頭であることは1～7地点の事実と同様であり、とりわけ加曽利E期を主体とすることは、上記した特徴点にかかわらず、明瞭な事実である。

2. 縄文時代早・前期の東台遺跡

大井町東台遺跡は、縄文時代中期中葉の勝坂Ⅱ式から後期初頭の堀之内Ⅱ式の間の各期の住居址の知られる集落であるが、このほかに、縄文早期の押型文の段階から前期後半の諸磯式の段階までの各期の遺物が出土することが、今回の調査で明らかになった。遺構と

しては、条痕文系土器の段階の炉穴と土壙が知られるのみであるが、この間の各時期の土器片が出土することは重要な事実である。

山形押型文土器(第17図47P 28)は、今のところ、大井町内で知られた最古の縄文式土器である。西・中部日本から中部山地に分布の中心がある押型文土器のうち、楕円押型文が粗大化する最後の段階よりは古いが、押型文細分のうえでの位置づけは困難である。

胎土に繊維を含む条痕文系土器群では、隆帯文をもつ類(第17図1)・(第17図5)、表裏に条痕をもつ類から、無文で胎土に多量の繊維をもつ類が出土した。このうちには茅山下層式に対比されるもの(第17図9)も含んでいる。

縄文早期の東海系の下吉井土器口縁部片(第17図14)は、打越遺跡53号住居址出土のものに相似たもので、町内では初見の土器である。

単節縄文をもち、胎土に微量の繊維を含み、器内面乳白色ないし灰褐色を呈する土器片(第17図26ほか)もかなり出土した。早期最末期又は前期初頭の1群である。

このほか前期前半の関山式・前期中葉の黒浜式・前期後半の諸磯B式に比定される遺物が、2号炉穴や土壙などから出土している。

上記したことは、押型文土器の段階から諸磯式の段階までの、すべての土器形式とは言えないが、断続しながらも多くの時期に東台遺跡へ人影が現われたことを示している。

今後、これらの時期の遺構検出も一つの課題であるが、それとは別に、早期末を中心とした上記の時期に人影の見られることの意味を考えて見たい。第一は、砂川堀下流の貝塚山遺跡などに居住した人々によるキャンプ地的な性格を、持っていたことである。居住地とは別に、湧水豊富な東台遺跡の地は、生活上の前進基地として恒常的に設定されるような、貝塚山遺跡などに住んだ人々の領域(テリトリー)であった可能性があるということである。第二は、東台遺跡の一部にこれらの時期の若干の遺構の存在を推定した場合は、下流の拠点集落を中心とした、遺跡群の一部を構成したことになる。

中期後半を中心とした時期の東台遺跡には、すでに合計48軒の住居址が知られ、それらは遺跡のごく1部の調査によることを考えれば、住居址総数は100をこす拠点集落と考えられる。早期末～前期の時期には、こうした性格と対照的に、拠点集落を中心とした遺跡群の1部またはキャンプ地としての性格を長期に亘ってもち続けたといえよう。このことが、後に拠点集落の選地として選ばれる基礎となったといえよう。

3. 縄文中期の東台遺跡

東台遺跡は縄文時代中期中葉の勝坂期新から、後葉にかけての加曽利E I・II・III期と後期初頭の称名寺、堀之内期にかけての大集落が営まれていたところである。縄文前期の海進期から海退期へと変移するころの遺跡は、福岡江川・砂川堀・富士見江川・柳瀬川など諸河川の下流域で、旧入間川と合流する地域の台地縁辺部に大きな集落を形成する。これらの遺跡としては、川崎、上福岡、貝塚山、黒貝戸、殿山、打越、水子の諸貝塚・御庵山崎、北通、南通遺跡などがあげられる。それが中期になると海退がますます進み旧入間川流域では成増あたりまで後退する。したがって、上記諸河川の流域に生棲する縄文中期の人々は、動植物の食糧資源を求めて、これら諸河川の中上流域へと溯って、武蔵野台地の縁辺部に集落を形成するものである。

東台遺跡もこうした動向を反映し、縄文中期の勝坂期新から大集落を営むのである。現段階ではこれより以前の中期初頭の遺構はみつかっていない。第1章の項で略述したように第1～第9地点の発掘調査で、中期45軒・後期初頭3軒の住居址が発掘されている。これらをもとにし、さらに分布調査の結果を総合して判断すると、東台遺跡は東西約300m南北250mの楕円形のひろがりをもつもので、その中央部は、やや低いくぼみを有している。したがって住居址等の遺構のあるところは、全体にやや高く、楕円形に集落が構成されている。東台遺跡の広がりを見るに、まず西側の大井弁天の崖上第1地点では、住居址の存在は全く認められず、黒褐色土層に縄文中期の包含層と、ローム面での野外炉が検出されている。またこれに隣接する東側の第3地点の発掘調査でも、縄文中期後半から後期初頭（加曽利E I～堀之内期）の炉穴と、加曽利E II期と考えられる落とし穴が検出されているがここでも住居址は全く認められない。第1と第3地点とを結ぶ地域は、現在でも標高26mの等高線（第28図）が南に入りこんでおり、縄文中期には、さらに大きく南に谷が入っていたであろう。この地域の西側は、南から北に向って緩斜面が続き、砂川堀の大きな谷に接している。この緩斜面に落とし穴をはじめ土壙が集中していたのである。集落の外辺部斜面に防禦的意味も含めて、落とし穴が設営されていたことは、この期の一般的特色といえよう。したがってこれに接する今回調査した第8地点の13号住居址が集落の西側の限界であり、第1・第3地点と第8地点との間に、集落の境を想定することができよう。第8地点に隣接する東側の第4地点とこの南接の第5・第7の各地点では、1・3号（第4地点）、5号（第5地点）、7号（第7地点）の各住居址が、大きさは異なっても、共に入口を南側に有し、約34mの一直線上に、10～14mのほぼ等間隔に配置されている。これだけの例で即断するのは無理があり、もっと大きな範囲の調査例からみなければならぬが、おそらく大きな円形集落を構成しているため、その一部の直線的配列とみることが

妥当であろう。それにしても集落構成の上で一定の規制のもとに配置されていたのである。

(第7地点は未整理のためE I期の住居址は若干増えるであろう) これらと第8地点の13号住居址との配置関係については、南側隣接地の今後の発掘調査によって明らかにしなければならない課題である。以上東台遺跡の主に西地域群(1・3・4・5・7・8)について述べてきたが、西地域群の縄文中期の集落が加曽利E I期から展開されるのに対して、同遺跡の東地域群(2・9地点)では35軒の住居址のうち5軒の住居址は勝坂期新から集落が営まれており、東地域群の方が1時期古く、同じ遺跡でも、現段階の調査例から、確実に二つ以上の集落拠点があるといえよう。東地域群の2・6・9地点の出土遺物については未整理のため、これらとの関係については改めて詳細に述べることにする。

引用参考文献

- 麻生 優 1978 「打越遺跡」富士見市教育委員会 P134 ほか
- 麻生 優ほか 1983 「打越遺跡」富士見市教育委員会
- 今村 啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)・(下)」『考古学雑誌』63—1・2
- 梅沢太久夫 1984 「埼玉県における縄文時代集落遺跡資料集成図集」『シンポジウム縄文時代集落の
ほか
変遷』
- 上福岡市教育委員会 1984 「私たちの埋蔵文化財」No.1
- 小泉 功ほか 1984 「東台遺跡」大井町史編さん委員会
- 笹森 健一ほか 1976 「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会
- 谷井 彪ほか 1982 「縄文中期土器の再編(図版)」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坪田 幹男 1983 「東部遺跡群発掘調査報告書Ⅲ・Ⅳ」大井町教育委員会
- 戸沢 充則ほか 1981 「新山遺跡」東久留米市教育委員会・新山遺跡調査会
- 〃 1982 「下里本邑遺跡調査会」「下里本邑遺跡」下里本邑遺跡調査会
- 永峯 光一 1982 「恋ヶ窪遺跡調査報告書Ⅲ」恋ヶ窪遺跡調査団・国分寺市教育委員会
- 沼沢 豊 1974 「松戸市金楠台遺跡」房総考古資料刊行会
- 橋口 尚武ほか 1984 「吉祥山」武蔵村山市教育委員会
- 橋本 勉 1984 「久台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎 朝雄 1980 「ト伝」埼玉県教育委員会
- 大森 昌衛 1977 「東京の地質をめぐって」築地書館



第28図 東台遺跡全体図 ($\frac{1}{1,600}$)

写 真 图 版

遺 跡 写 真

遺 物 写 真



東台遺跡と周辺の環境



2 号 土 坑



7 号 土 坑



8 号土坑(手前) · 9 号土坑



9 号 土 坑



10 号 土 坑



12 号 土 坑



柱 穴



柱 穴

图版 3



1



2



3



4



5



6

1. 13号住居址炉体土器

2. " 埋設土器

3. " 覆土中出土土器

4. " " "

5. 2号土壙覆土中出土土器

6. " " "

第7图 1 (P13)

" 2 (")

" 3 (")

" 4 (")

第14图 2 (P20)

" 1 (")

13号住居址
埋設土器出土状态



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



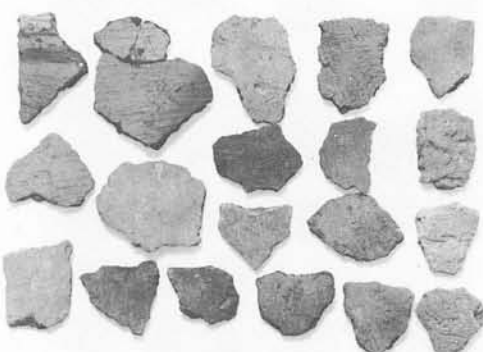
13号住居址出土土器



土 壙 出 土 土 器



13号住居址出土石器



土 壙 出 土 土 器

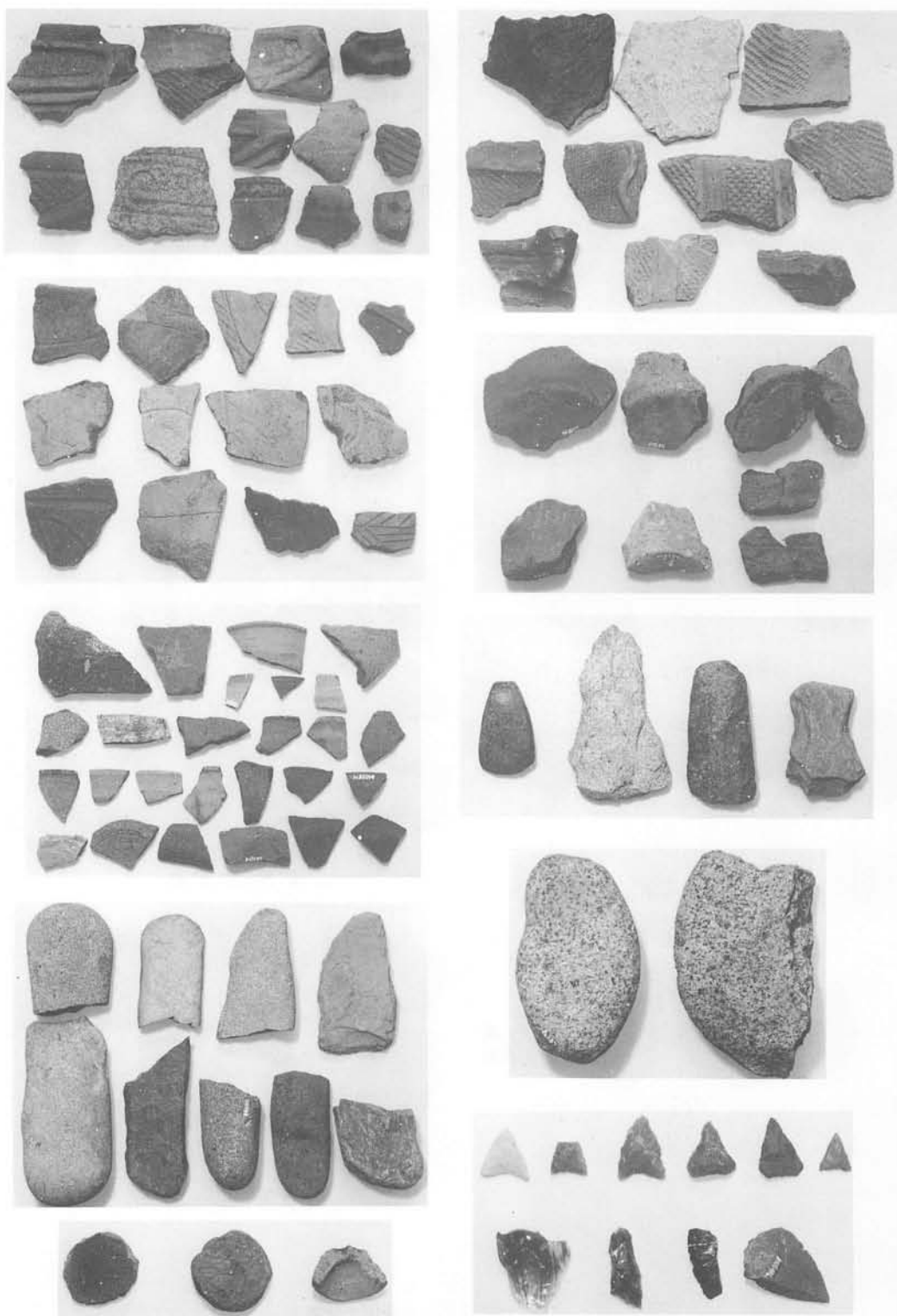


土 壙 出 土 土 器

土 壙
出土石器

13号住居址遺物出土状態

図版 5



遺構以外から出土した遺物

大井町史料第37集

東 台 遺 跡 II

第8地点発掘調査報告書

1985年3月10日 印刷

1985年3月30日 発行

編集 大井町史編さん委員会

発行 大井町教育委員会

〒354 埼玉県入間郡大井町大字亀久保1103-1

TEL 0492-61-2811 (代表)

印刷 有限会社金子印刷所 上福岡市富士見台14-12
